

岩手県文化財調査報告書第49集

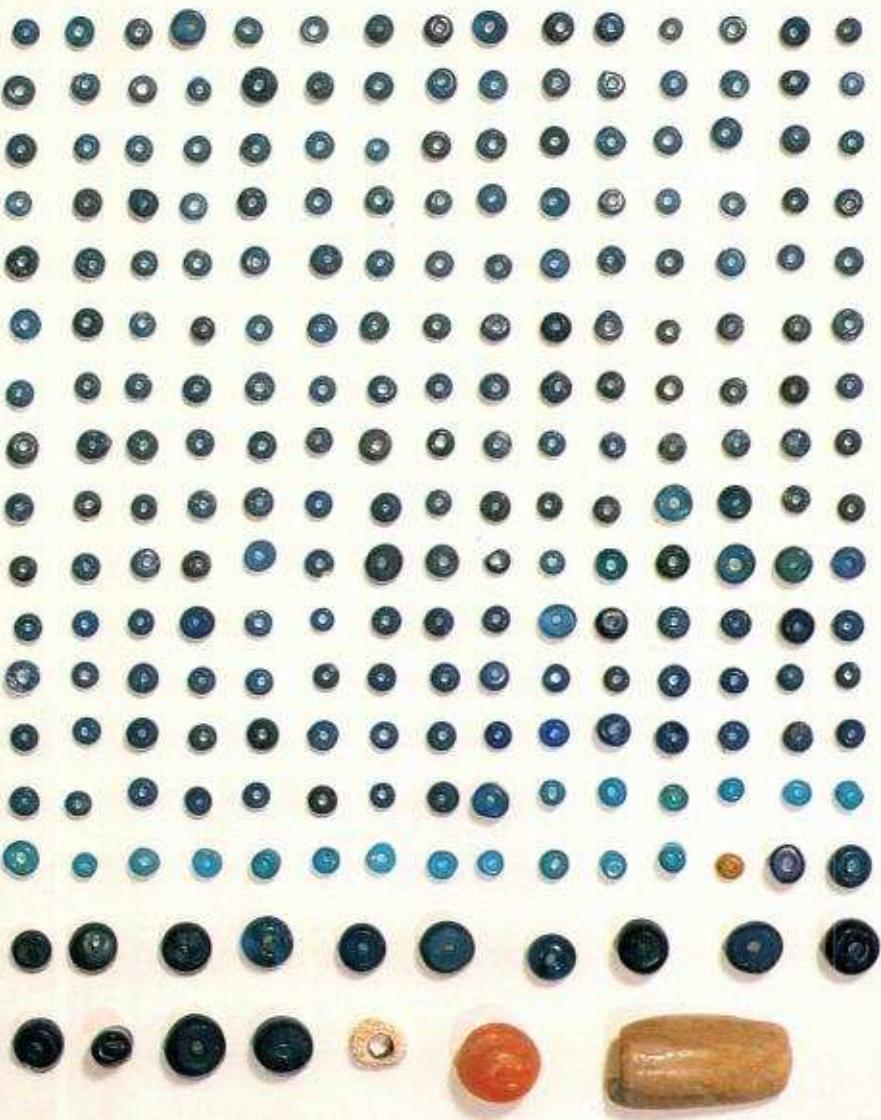
東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書

— V —

(鴻ノ巣館遺跡、高畠遺跡、白沢遺跡)

昭和55年3月

岩手県教育委員会
日本国有鉄道盛岡工事局



白沢遺跡出土の副葬品(ガラス小玉・管玉)

(1:1)

序

本県には私達の祖先が長い歴史の間につくりだし、伝えてきた貴重な文化遺産が数多く存在しています。この貴重な遺産を保護、保存すると共に、新たな文化創造の基礎とすることが重要な責務であります。

全国新幹線鉄道整備法にもとづき県民待望の東北新幹線建設工事が施行されることと関連し、失われようとするルート内48遺跡について、日本国有鉄道盛岡工事局からの委託により岩手県教育委員会が調査主体となり、昭和47年度から昭和54年度までの8年間にわたって発掘調査、整理作業、報告書作成作業を実施してまいりました。53年度においては、40遺跡分を3分冊に分け報告書を刊行し、最終年度である本年度は残り8遺跡について刊行するはこびとなりました。

本報告書の内容は「東北新幹線関係埋蔵文化財報告書」Vとして、縄文時代中期末における集落跡であった石鳥谷町高畠遺跡、奈良時代の古墳を中心とした矢巾町白沢遺跡、平安時代の集落跡であった江刺市鴻ノ巣館遺跡についての調査結果のまとめであります。

特にそのなかでも高畠遺跡における石器製作に関係した剥片貯蔵施設の発見は、その剥片の復元接合操作をすることによって、縄文時代における石器製作過程の解明に貴重な資料を提供できると思います。

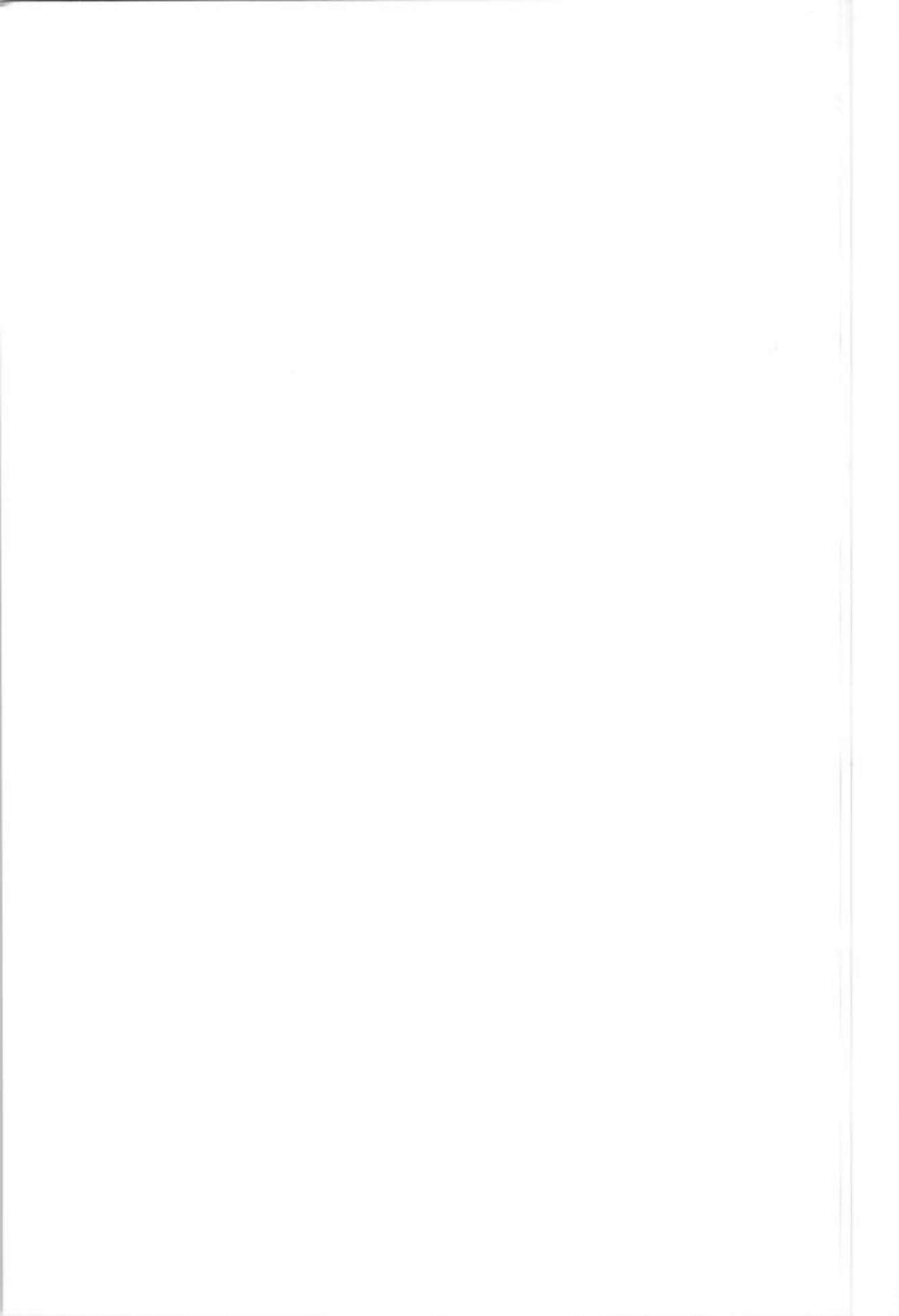
この報告書がいさかでも埋蔵文化財の活用と学術研究のために役立つことができれば幸いです。

最後にこの調査について長期間にわたり御援助、御協力いただいた地元教育委員会をはじめ関係各位に対し心から感謝申し上げます。

昭和55年3月

岩手県教育委員会

教育長 新里 益



例　　言

1. 本書は東北新幹線関係遺跡発掘調査報告書7分冊の中の第5分冊として、昭和48年度に発掘調査した矢巾町所在の白沢遺跡、それに49年度に調査を実施した江刺市所在の鴻ノ巣館遺跡と石鳥谷町所在の高畠遺跡の3遺跡について作成したものである。

2. 遺跡の記載は南（江刺市）から順に編集した。

3. 本書収録遺跡の発掘調査、および調査資料において次の方々からご指導、ご助言を賜わった。（敬称略）

・岩手大学名誉教授　　板橋　源

・岩手大学教授　　草間　俊一

・北海道大学助教授　　林　謙作

・岩手県文化財審議会委員　　司東　真雄

・江刺市文化財調査委員　　佐嶋与四右エ門

4. 本書における資料の鑑定、分析などについては、次の方々と機関からご教示、ご協力を賜わった。（敬称略）

・石材鑑定

　岩手県立杜陵高等学校教諭　　佐藤　二郎

・種子鑑定

　農林水産省林業試験場東北支場　　村井　三郎

・遺構埋土堆積土壤リン分析

　岩手大学農学部助教授　　井上　克弘

・火山灰鉱物組成（X線回折）

・鉄津の組成分析およびX線回折

・ガラス玉組成（X線回折・蛍光X線分析）

　以上岩手県工業試験場

5. 本書に掲載した地形図、空中写真は建設省国土地理院発行の5万分の1地形図・20万分の1地勢図、および2万分の1空中写真を使用したものである。

6. グリッド配置図は、日本国有鉄道作成による500分の1地形図を使用した。

7. 土質柱状図は、日本国有鉄道所有のボーリング資料等を参考にした。

8. 本書の観察表、図版は次の要項に従って作成されている。

(1) 遺跡における層相と遺物の色調観察は、小山・竹原編著『新版 標準土色帖』日本色研

事業(株)を使用した。

(2) 遺構、遺物の実測図は、原則として統一した縮尺になるように努めた。

9. 方向は、新平面直角座標第X系(東北)による座標北を矢印で示してある。

原点 (経度 140°50'00"000
緯度 40°00'00"000)

各遺跡の基準線との方向角は別表(第1表)のとおりである。

10. 遺物・写真・実測図等の資料は、岩手県教育委員会事務局文化課において保管している。

11. 調査主体者

岩手県教育委員会・日本国有鉄道盛岡工事局

12. 調査担当者

岩手県教育委員会事務局文化課

13. 本書の執筆のまとめは次のものが中心にあたった。

・調査の経過 岩千秋

・調査の方法・整理の方法等... 朴沢 正耕

・鴻ノ巣館遺跡 鈴木 隆英・齊藤 孝

・高畠遺跡 菅原弘太郎・鈴木 優子

・白沢遺跡 朴沢 正耕

なお、遺物、図面の整理、実測、および写真の撮影などは期限付臨時職員がこれを補助した。

14. 各遺跡の執筆にあたっては、つとめて文中の記述の統一に心がけたが、充分な検討を欠いた向きもある。

目 次

序文

1. 調査の経過	1
2. 調査の方法	4
3. 整理の方法	5
4. 遺物保存処理の方法	6
5. 広報活動の実施	6

本文

鴻ノ巣館遺跡

I. 鴻ノ巣館遺跡の位置と環境	13
1. 位置	13
2. 地形	13
3. 周辺の遺跡	17
II. 調査の方法と経過	21
1. 調査の方法	21
2. 調査の経過	22
III. 調査の成果	25
1. 基本層序	25
2. 発見された遺構と遺物	26
〔1〕発見された遺構の種類と数及び遺物の種類	26
〔2〕古代の焼物の分類基準について	29
〔3〕遺構と遺物	43
IV. まとめ	142
1. 住居跡について	142
2. ピット類	149
3. 溝類	149
4. まとめ	150

高畠遺跡

I. 遺跡の位置と環境	165
1. 立地と現状	165
2. 周辺の遺跡	168
II. 調査の方法と経過	171
1. 調査の方法	171
2. 調査の経過	171
III. 調査の結果	172
1. 遺跡の基本層序	172
2. 発見された遺構と遺物	176
〔1〕竪穴住居跡・炉跡	179
〔2〕土壙	213
〔3〕遺構外出土遺物	216

IV. 考察	219
〔1〕造構	219
〔2〕遺物	223
〔3〕F G 50住居跡出土接合資料について	233
V. まとめ	250

白沢遺跡

I. 遺跡の位置と環境	255
1. 立地と現状	255
2. 周辺の遺跡	258
II. 調査の方法と経過	263
1. 調査の方法	263
2. 調査の経過	263
III. 調査の結果	264
1. 遺跡の基本層序	264
2. 発見された造構と遺物	266
〔1〕縄文時代の造構	266
〔2〕奈良時代の造構	274
〔3〕周溝埋土から出土した縄文・弥生時代の遺物	288
〔4〕平安時代の造構	308
VI. 考察	322
〔1〕土壤と出土遺物	322
〔2〕円形周溝と出土遺物	325
〔3〕豎穴住居跡と出土遺物	330
〔4〕周溝埋土内の出土遺物	330
V. まとめ	335
(付)	
・矢巾町白沢遺跡・土壤のリン分析	339
・白沢遺跡出土品分析結果	342
・火山灰分析結果	344

写真図版

江刺地区空中写真	357
石鳥谷地区空中写真	358
矢巾地区空中写真	359
鴻ノ巣館遺跡	361
高畠遺跡	385
白沢遺跡	417
・発掘調査担当者および協力機関	447
・発掘調査地元作業員名簿	447
・整理作業員名簿	448
・岩手県教育委員会事務局文化課職員一覧（埋蔵文化財関係）	449

序 文

1. 調査の経過

昭和46年から実施された岩手県内東北新幹線建設工事に関する埋蔵文化財発掘調査は一関市より盛岡市に至る約101kmの間がその対象であり、発掘調査実施前の協議、分布調査の段階から発掘調査実施、調査結果の報告書刊行まで約9年の歳月を要した。ここでは1. 発掘調査実施前の経過 2. 年度別発掘調査の経過 3. 整理報告書作成の経過に大別し、その概要についてまとめてみたい。

(1) 発掘調査実施前の経過

全国新幹線鉄道整備法（昭和45年5月18日法律第71号）に基づく東北新幹線建設予定地内における県内埋蔵文化財の取扱いについての最初の協議は昭和46年5月17日に日本国有鉄道盛岡工事局と岩手県教育委員会との間で行なわれ、運輸大臣に提出する申請書に添付する文化財資料は遺跡台帳により作成することとし、今後県教育委員会は分布調査実施のための準備と、建設工事に関連ある範囲内での遺跡についての情報を提出することにした。昭和46年11月2日、新幹線建設予定地内の分布調査実施のための協議をもち調査員は県教育委員会が関係市町村教育委員会の協力のもとに、県文化財専門委員、考古学専攻者、発掘調査経験者の中から委嘱をし市町村単位ごとに班の構成をした。遺跡分布調査は宮城県境より盛岡市に至る約101kmを巾2kmの範囲で実施することとし、11月20日より約2ヶ月の期間で終了した。その結果93遺跡が確認された。

昭和47年4月に主管課である社会教育課に4名の埋蔵文化財担当職員を文化財主査として配置し、さらに4名の嘱託補助員を採用した。東北新幹線担当職員として鳴千秋文化財主査が当り他は東北縦貫自動車道関係の業務を担当しそれぞれの業務の遂行に当った。更に同年6月1日より10日までの間、新幹線ルート用地杭の設置時期に合わせセンター杭を中心に、20m巾に含む遺跡範囲確認のための現地調査を鳴千秋、菊地郁雄両文化財主査によって行ない、その結果43遺跡を発掘調査対象遺跡として決定した。その後、新幹線関連事業として東北本線北上貨物操作場の建設予定地と用地問題で現地踏査ができずにいた花巻地区の分布調査の追加により最終的に48遺跡が発掘調査対象の遺跡となった。その結果に基づき調査行程、方法等について協議を進め、全遺跡が記録保存を前提としての発掘調査を実施することにした。

(2) 発掘調査の経過

当初、東北新幹線開業は昭和51年度であり49年度中に発掘調査を終了しなければ支障がある

ということが調査計画立案にあたっての最大の悩みでもあった。そのため野外の発掘調査を優先先行させ、調査結果の整理、報告書の作成、刊行は別途に考えることとした。そのことから冬期間に入ても発掘調査を継続せざるを得ないこともあり、調査の精度や報告書作成の面からも反省すべき点が多くあった。調査開始後の経過の中で国内経済に大きな影響を与えた総需要抑制政策等が原因となって、東北新幹線開業時期が延期となり発掘調査期間は昭和47年10月から52年10月までとなった。調査結果の整理と報告書作成作業は53・54年度の2カ年で実施することとした。なお、埋蔵文化財発掘調査委託の契約は年度ごとに日本国有鉄道盛岡工事局長と岩手県知事との間で締結された。調査主体者は岩手県教育委員会教育長、調査主管課は岩手県教育委員会事務局文化課である。

次に年度ごとの主な発掘調査経過について略記する。

昭和47年度 調査員3名、補助員1名、調査期間10月25日～12月8日。18遺跡。

矢巾町所在の下赤林I遺跡、下赤林III遺跡、高畠遺跡を調査した。この調査は用地未買収時期の調査であり、国鉄が地権者より発掘承諾を得ての調査であった。

昭和48年度 調査員8名、補助員5名、調査期間5月1日～1月29日。3遺跡。

4月、文化課の新設と共に埋蔵文化財調査班が誕生し、本格的な発掘調査が開始された。しかし、用地買収の関係などから年間スケジュールが確定しないまま、まず北上貨物操作場関連遺跡の南館遺跡よりスタートした。ここでは発掘調査方法の統一化を計るために新幹線班全員による合同研修調査を実施した。そして7月より1遺跡2名の調査員と1名の補助員を最低の班構成員とし、遺跡規模によって構成員を調整することとして8遺跡の調査を実施した。夏休み期間には発掘調査の経験のある教員、岩手大学生、京都女子大生の協力参加を得た。12月に入って杉の上II遺跡において平安時代の焼失堅穴住居跡から多量の炭化材の発見があり、炭化材の処理上やむを得ずビニールハウスの設置の中で1月下旬まで冬期間の調査となった。

昭和49年度 調査員8名、補助員5名、調査期間4月8日～12月20日。17遺跡。

江刺市と稗貫郡石鳥谷町所在の遺跡が主な調査地域となった。江刺市落合II遺跡は分布調査による遺跡範囲は北上川流域に広がる河岸低地における水田面より約1m高い微高地一帯としていたが、水田面における新幹線高架橋建設工事中に多量の遺物が発見され、地元教育委員会からの連絡があり、そのため遺跡範囲を広げ調査した結果、水田面下旧河道の泥炭層から平安時代の豊富な遺物資料の発見となり貴重な遺跡となった。江刺地区の調査は北上川東岸一帯であり各遺跡は蛇行しながら南下する北上川とその支流である広瀬川、人首川、伊手川の氾濫により度々冠水をうけていることから遺構の検出、精査の際に土層判別と遺構範囲の確認に手間が多く多くの時間を費やした。

昭和50年度 調査員8名、補助員7名、調査期間4月10日～2月21日。15遺跡。

調査地区が、一関市、江刺市、北上市、花巻市、紫波郡紫波町、都南村、それに盛岡市と広範囲におよび、調査班相互の連絡、調整が困難な年であった。7月に北上市鬼柳町町分の新幹線建設予定地内にあったイチョウの大木の根元から一字一石絆を地元民である佐藤忠二、佐藤丑蔵氏が発見されたことから鬼柳西裏遺跡としての取り扱いをすることとした。調査の結果、縄文時代、平安時代、近世の各時期にわたる複合遺跡となり2年継続の調査となった。また江刺市宮地遺跡は奈良時代から平安時代にかけての大集落となり調査中に2基の井戸が発見され、そのため乾水期である冬期間の調査となった。厳寒の中で2月末までの調査となり、遺構実測図の完成と井戸枠のとり上げを行なった。紫波町西田遺跡は北上山地における小丘陵の西端にあり蛇行する北上川によって切離された台地に立地し滝名川と北上川低地に囲まれた残丘上にある。標高100m前後で周辺の水田面との比高は約10mである。この丘陵のほぼ中央を南北に縦断する新幹線予定地を調査対象としたが、ほとんどが山林であり遺跡としての確認はなかなかつかめなかった。立地形に調査根拠をもつたこともあって、まず本年度は遺構検出のための調査を目的としたグリッド方式と重機使用（バックホー）による表土はぎを行なった。その結果、縄文時代早期、中期、平安時代にわたる大遺跡であることが確認された。なお、年度末人事異動で昭和48年度より調査を担当した蜂谷伸平氏が陸前高田市立高田小学校へ転勤された。

昭和51年度 調査員7名、補助員8名。調査期間4月9日～12月23日。9遺跡。

昨年度よりの調査継続である江刺市宮地遺跡、北上市鬼柳西裏遺跡、紫波町西田遺跡と盛岡市所在の4遺跡が調査の中心であり本年度で48全遺跡について調査が及んだことになった。西田遺跡は北部地区に縄文時代中期の墓壙群を中心とする集落の全貌が現われ次年度の調査によって結着をつけざるを得ないことになった。48年度から新幹線班で調査担当した宍倉圭介氏が県立遠野農業高校へ、菊池久氏は釜石市立大松小学校へそれぞれ年度末人事異動で転勤された。

昭和52年度 調査員6名、補助員7名。調査期間4月11日～12月15日。1遺跡。

紫波町西田遺跡のみの調査となった。縄文時代中期における墓壙群、円筒形ピット群、貯蔵穴群、住居跡群によって構成された大遺跡の調査をもって新幹線関連48全遺跡の発掘調査を終了した。調査結果の整理はそれぞれの年度における発掘調査終了後、分室において図面、写真遺物等の整理を一部実施した。

(3) 整理・報告書作成の経過

昭和53年度 調査員6名、期限付臨時職員12名。

53、54年度の2年間にわたる本格的な整理作業に入った。53年度は48遺跡のうち40遺跡の報告書作成のための作業を実施し、3分冊を刊行した。1分冊は一関、江刺地区(10遺跡)、2分冊は北上、花巻、石鳥谷地区(11遺跡)、3分冊には紫波、矢巾、都南、盛岡地区(19遺跡)を収録した。

昭和54年度 調査員 6名、期限付臨時職員12名。

本年度は整理作業の最終年度に当たり、新幹線関連遺跡48遺跡の残り 8 遺跡の報告書作成のための作業を実施した。本年度は報告書 4 分冊とし、前年度の 3 分冊に続き第 5 分冊として江刺市の宮地遺跡、6 分冊として江刺市の鴻ノ巣館遺跡、石鳥谷町の高畠遺跡、矢巾町の白沢遺跡の 3 遺跡、6 分冊には江刺市の落合 II 遺跡、北上市の南館遺跡と鬼柳西裏遺跡の 3 遺跡、第 7 分冊には紫波町の西田遺跡をそれぞれ収録した。

2. 調査の方法

遺跡の調査は原則として以下のような方法を用いた。

(1) 調査対象範囲の選定

新幹線建設地内、及び付帯施設建設地内にかかる遺跡は、全て調査対象とした。

(2) 調査区の設定

調査対象範囲全域にグリッドを設定し、計画的な調査と同時に遺構の平面的位置の把握につとめた。グリッドは調査地の地形を考慮し、東北新幹線の任意の中心杭の 2 点（東京基点の距離程が明示してあるもの）を原点とし、両者を結ぶ線、およびこれに直交する線を基準線とし 3 m 単位に割付け、30m で 1 地区とした。グリッド名は東西方向を数字、南北方向をアルファベットで表わし、両者の組合せで呼称した。なお、地区名は調査区の北から順に設定した。

(3) 探索発掘と全面発掘

① 探索発掘と全面発掘

調査対象範囲内における遺構の分布状況を調べるため、原則として 3 m × 3 m のグリッドを市松状に粗掘し、検出作業を進めた。また、基本的な層位の把握のための深掘りを設定した。遺構や遺物を含む層が検出された場合は、その具体的な内容と分布関係などを突明するため、必要な範囲にわたって全面発掘を行なった。

② 遺構調査の方法

検出された遺構については、該当のグリッド名を付した。その場合、最も北西に位置するグリッドで呼称した。遺構の精査にあたっては、記述項目を統一したカードなどを使用した。

③ 遺物の取り上げ

a 遺物は原則としてグリッドごとに取り上げ、遺跡記号、出土年月日、出土地点、出土層位を記録の上、取り上げた。

b 出土遺物のうち、その遺構に直接関係するものや、年代決定資料となり得るものについては、出土レベルと位置を平面図に記録し、遺物番号を付して取り上げた。

④ 実測図の作成

断面図—断面図は基本層位、遺構の堆積状態や遺構細部の在り方を示す遺構断面を作成した。原則として、原図の縮尺は $1/100$ であるが、カマド、炉、埋設土器などの細部については、必要に応じて $1/50$ などの縮尺を用いた。各層における土色、土性、混入物、堅さ、遺物のあり方などの注記は統一を心がけたが一部統一を欠いたものもある。

平面図—平面図は調査区全域を表現したもの、遺構や遺物包含層での遺物の出土状況を記録するための部分的なものとがある。原図の縮尺は $1/100$ を原則としたが、必要に応じて $1/50$ などの縮尺を用いた。測量方法は、遺り方測量により作図した。

⑤ 写真の記録

記録として撮影した写真には、35mm版モノクロ写真、35mm版カラー写真、35mm版エクタクローム写真(スライド用)、 6×7 モノクロ写真、35mm版赤外線写真などがある。

⑥ その他の記録

調査記録として、調査日誌、業務日誌を各遺跡ごとに備え、記録した。また、調査終了後の整理時においても、業務日誌、作業記録、遺構カードを備え、記録した。

第Ⅰ表 第V分冊収録遺跡基準線方向角 (N…座標北)

遺跡名	原点距離程	原点間方向角
鴻ノ巣館遺跡	430,520km—430,560km	N—15°49'10" -W
高畑遺跡	462,400km—462,460km	N—3°02'30" -W
白沢遺跡	481,740km—481,820km	N—9°05'14" -W

3. 整理の方法

発掘調査の期間内で現場作業と併行して行った整理作業は遺物の洗浄だけであり、大部分は分室の整理場所で進められた。整理にあたっては図面、遺物、写真とそれら整理基準を作成して実施した。

(1) 図面整理の方法

発掘調査時に作成した図面は次のような要領で整理した。

第一原図は、点検、修正の上、登録番号を付し、それをもとに第二原図を作成し、それを図面台帳に記載した。

(2) 遺物整理の方法

遺物は洗浄し、遺跡記号、採取年月日、遺構名、地区名、層位、遺物番号等を符し、接合、復元作業を進めた。その後分類作業を進める中で、資料化できる遺物について、実測図、拓本

の作成をし、写真撮影をした。

(3) 写真整理の方法

写真は遺跡ごとにそれぞれのネガと密着焼付のものをアルバムに貼付し、遺構名、地区名、遺物番号、関係実測図番号、撮影方向などを記入し、整理した。

4. 遺物保存処理の方法

出土遺物のうち、木製品、鉄製品については可能な範囲で保存処理をおこなった。本書収録の遺物のうち、鉄製品（鋤先）は財團法人元興寺文化財研究所に委託し、樹脂含浸による保存処理をおこなった。

5. 広報活動の実施

調査内容を広く知らせ、文化財についての关心を深めてもらうことを意図し、次のような活動をした。

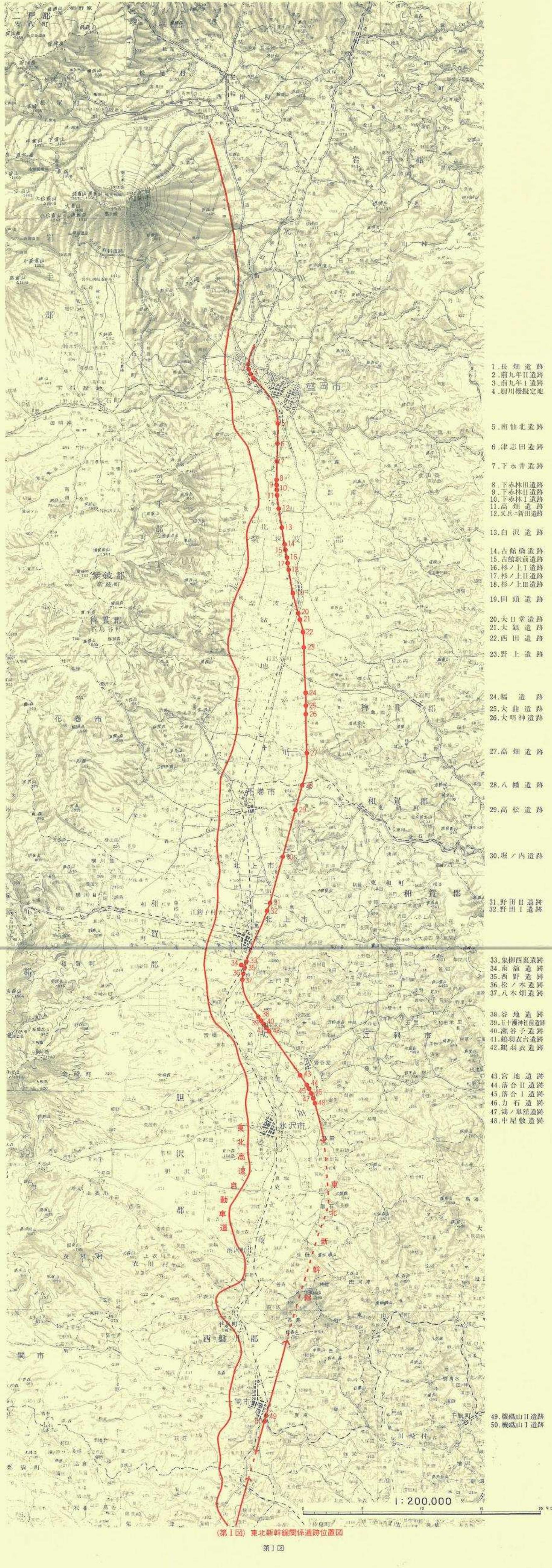
- ・現地説明会
- ・現場だよりの発行
- ・関係機関への資料提供

第II表 東北新幹線関係遺跡一覧

(位置一覧は第1図を参照)

所 在 地	遺 跡 名	調査対象面積	調 査 期 間	収録報告書No.
一 関 市	機 織 山 I 遺 跡	3,500 m ²	昭50. 9. 30~昭50. 11. 29	I
タ	機 織 山 II 遺 跡	1,470	昭50. 9. 22~昭50. 11. 11	I
江 刺 市	中 屋 敷 遺 跡	5,000	昭48. 12. 10~昭48. 12. 22	I
タ	鴻 ノ 島 館 遺 跡	6,400	昭49. 6. 24~昭49. 10. 24	V
タ	力 石 遺 跡	2,240	昭49. 4. 8~昭49. 4. 18	I
タ	落 合 I 遺 跡	2,560	昭49. 4. 18~昭49. 8. 5	I
タ	落 合 II 遺 跡	2,420	昭49. 4. 8~昭49. 8. 8	VI
タ	宮 地 遺 跡	3,600	昭50. 9. 1~昭51. 7. 26	IV
タ	鶴 羽 衣 遺 跡	1,280	昭49. 4. 9~昭49. 5. 14	I
タ	鶴 羽 衣 台 遺 跡	960	昭49. 4. 19~昭49. 5. 10	I
タ	瀬 谷 子 遺 跡	2,400	昭49. 5. 8~昭49. 6. 19	I
タ	五 十 瀬 神 社 前 遺 跡	1,600	昭49. 6. 4~昭49. 7. 30	I
タ	谷 地 遺 跡	2,720	昭49. 7. 25~昭49. 9. 3	I
北 上 市	八 木 煙 遺 跡	800	昭49. 11. 28~昭49. 12. 9	II
タ	松 ノ 木 遺 跡	480	昭50. 12. 16~昭50. 12. 25	II
タ	西 野 遺 跡	5,000	昭50. 9. 1~昭50. 12. 25	II
タ	南 館 遺 跡	4,660	昭48. 5. 1~昭48. 7. 26	VI
タ	鬼 柳 西 裏 遺 跡	4,400	昭50. 9. 3~昭51. 12. 15	VI
タ	野 田 I 遺 跡	3,000	昭51. 8. 6~昭51. 8. 28	II
タ	野 田 II 遺 跡	1,920	昭50. 9. 1~昭50. 9. 19	II
タ	堀 ノ 内 遺 跡	2,400	昭50. 7. 7~昭50. 8. 30	II
花 卷 市	高 松 遺 跡	2,000	昭50. 6. 4~昭50. 7. 9	II
タ	八 輛 遺 跡	1,800	昭51. 10. 7~昭51. 11. 25	II
石 烏 谷 町	高 煙 遺 跡	2,720	昭49. 10. 25~昭49. 12. 20	V
タ	大 明 神 遺 跡	3,680	昭49. 10. 25~昭49. 11. 22	II
タ	大 曲 遺 跡	1,920	昭49. 10. 25~昭49. 12. 12	II
タ	幅 遺 跡	2,400	昭49. 11. 18~昭49. 11. 29	II
紫 波 町	野 上 遺 跡	2,400	昭49. 10. 17~昭49. 10. 29	III
タ	西 田 遺 跡	29,600	昭50. 4. 26~昭52. 12. 15	VII
タ	大 銀 遺 跡	960	昭50. 4. 10~昭50. 4. 26	III
タ	大 日 堂 遺 跡	2,240	昭50. 5. 16~昭50. 6. 10	III
タ	田 頭 遺 跡	1,760	昭49. 9. 5~昭49. 10. 16	III
タ	杉 ノ 上 III 遺 跡	3,402	昭48. 10. 16~昭48. 12. 28	III
タ	杉 ノ 上 II 遺 跡	4,276	昭48. 10. 16~昭49. 1. 29	III
タ	杉 ノ 上 I 遺 跡	7,200	昭48. 7. 18~昭48. 10. 16	III
タ	古 館 駅 前 遺 跡	3,360	昭48. 10. 1~昭48. 11. 30	III
タ	古 館 橋 遺 跡	4,200	昭48. 9. 18~昭48. 12. 8	III
矢 巾 町	白 沢 遺 跡	3,726	昭48. 7. 20~昭48. 9. 29	V
タ	又 兵 衛 新 田 遺 跡	2,080	昭49. 10. 18	III
タ	高 煙 遺 跡	640	昭47. 11. 24~昭47. 12. 2	III
タ	下 赤 林 I 遺 跡	2,720	昭47. 10. 25~昭47. 12. 16	III
タ	下 赤 林 II 遺 跡	3,200	昭48. 11. 13~昭48. 12. 19	III
タ	下 赤 林 III 遺 跡	2,560	昭47. 12. 2~昭47. 12. 18	III
都 南 村	下 永 井 遺 跡	1,760	昭50. 4. 10~昭50. 4. 24	III
タ	津 志 田 遺 跡	4,800	昭50. 4. 23~昭50. 5. 15	III
盛 囲 市	南 仙 北 遺 跡	800	昭50. 4. 10~昭50. 4. 25	III
タ	厨 川 檜 擬 定 地	4,600	昭51. 5. 17~昭51. 10. 16	III
タ	前 九 年 I 遺 跡	5,150	昭51. 4. 23~昭51. 6. 3	III
タ	前 九 年 II 遺 跡	3,400	昭51. 4. 19~昭51. 6. 2	III
タ	長 煙 遺 跡	6,370	昭51. 4. 9~昭51. 5. 15	III

※杉ノ上 I・II・III遺跡はI遺跡として登録してある。



本文

鴻ノ巣館遺跡

遺跡記号：K D

所在地：江刺市愛宕字力石380他

調査期間：昭和49年6月24日～10月24日

調査対象面積：6,400m²

平面実測基準点：東京起点430,560km(FA50)

基準高：海拔37.00m, 38.50m 他

I. 鴻ノ巣館遺跡の位置と環境

1. 位置（第1図）

鴻ノ巣館遺跡は岩手県南のほぼ中央部、江刺市愛宕字力石（通称稗田）地内に所在する。遺跡所在地の江刺市は現在、総人口約36,000、市域総面積約360.77km²の農業、商業を中心とした小都市である。その市域は東西約24km、南北約38kmの範囲に及び、旧江刺郡内の1町9ヶ村を含んでいる。

隣接する市町村としては、山地などを境に北側に和賀郡東和町、北上市、東側には遠野市、氣仙郡住田町、南側には東磐井郡大東町がある。さらに西側には北上川などを境に胆沢郡金ヶ崎町、水沢市が隣合っている。

市の中心街は市域西辺部の岩谷堂地区にあり、ここから県庁所在地の盛岡市までは北に約55km離れており、水沢市の中心街までは南西に約6km、北上市の中心街までは北北西に約12kmそれぞれ離れている。

東北新幹線は、この中心市街地のさらに西方の愛宕、稻瀬両地区の水田地帯を通過する。南東—北西方向に緩くカーブしながら延びるこのルート上には、9ヶ所の遺跡が知られている。鴻ノ巣館遺跡も上記9遺跡の1つであるが、その中心は岩谷堂地区の市街地の南方約3km付近に位置しており、すぐ東側には人首川が南流し、中央部を田原地区と愛宕地区を結ぶ農免道が東西方向に走っている。

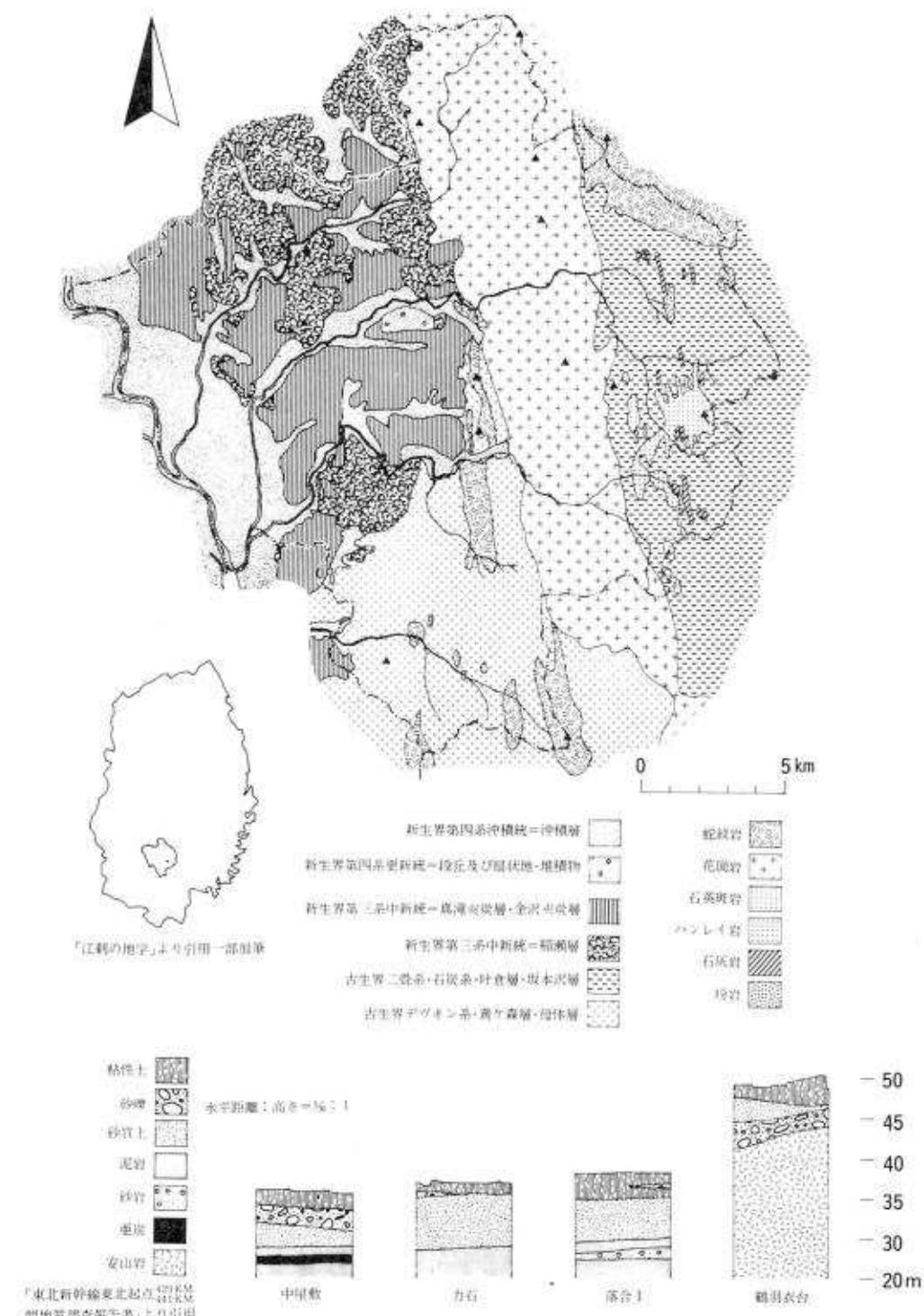
2. 地形（第1、2図）

鴻ノ巣館遺跡のある、岩手県中南部の地形域は奥羽脊稜山地帯、北上山地帯、北上盆地の3地形域に大別される。

そのうち、県西部域を占める奥羽脊稜山地帯は主として、第三紀中新世以降の火山岩類や堆積岩類よりなる。比較的新期に形成された山地帯で、東北地方の中央部を南部に走り、東北地方全域を日本海側と太平洋側に分ける主要分水界をなしている。

北上山地帯は県東部域全体に広がり、太平洋岸まで続く山地帯で、主として古生代の堆積岩・変成岩・中世代の深成岩・変成岩類よりなる。ただしその辺縁部には第三紀中新世の火山岩類

鴻ノ巣館遺跡



第1図 江刺市の位置図・地質概念図および江刺平野の新幹線通過区域内の地質柱状図

や鮮新世の堆積岩類の分布も認められる。比較的古期に形成された山地帯であるため、前記の奥羽脊稜山地と比べて、侵食が進み、全般的に起伏がなだらかである。その傾向は辺縁部で特に著しく、山地が、より低平な丘陵地に漸移してゆく状況が見られる。

北上盆地は前記の両山地帯に挟まれて、南北に延びる、細長い低地帯である。その底部には第三紀以降の堆積層が厚く積もっているが、表層部には第四紀洪積世以降の沖積平野や河岸段丘などの平原地形が発達している。これらの平原地形は主として、北上川とその支流諸河川の侵食、堆積作用によって形成されたものである。

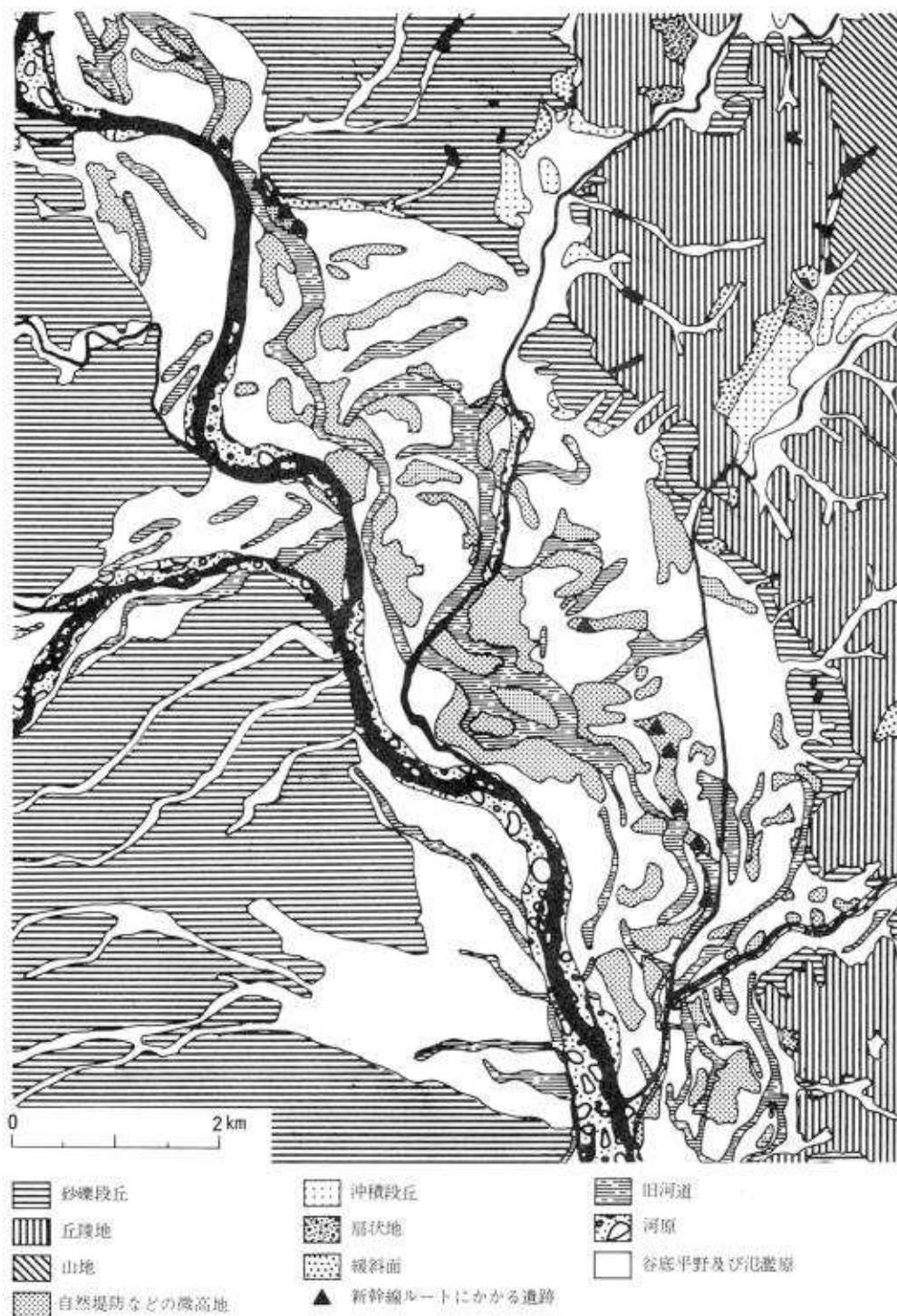
⁽³⁾ 北上川は岩手県北の山地に源を発し、南流して宮城県石巻市付近で太平洋に注ぐ、全長約249kmの、本邦第4位の長流である。主流部の流域総面積約10,250km²に及ぶ北上川は、江刺市などのある中流域で、北上盆地の東辺部沿いに、緩く蛇行しながら南下を続ける。川の両岸部には沖積平野を挟んで河岸段丘が形成されているが、地形の発達は西岸部で特に著しく、奥羽脊稜山地帯の東麓部一帯に、広大な複合扇状地性の河岸段丘地形が展開している。それに比べて東岸部では、山地が川に迫り、大規模な河岸段丘の発達は見られない。⁽⁴⁾

以上の様な岩手県中南部の地形状況の中で、鴻ノ巣館遺跡周辺部の地形について見ると次の様な事がわかる。

北上盆地の東辺部を緩く蛇行しながら南下を続ける北上川は、江刺市西辺部にさしかかるとそれまで南南西方向に流れていた向きを大きく変え、金ヶ崎町三ヶ尻方面から東方の江刺市三ヶ尻方面に向かって東流する。その後、川はさらに蛇行を繰り返しながら、全体として水沢市の境界部を東南東方向に流れ、前沢町方面に抜けていく。河岸段丘と山地・丘陵で囲まれた川の両岸河谷部には、沖積平野が形成されているが、その発達は東岸の江刺市側で特に著しい。江刺市側のこの平野は俗に江刺平野と呼ばれ、市域の大半が山地と丘陵地で占められる江刺市にあって、最大の平野部になっている。その海拔高度は、大体35m~45m内外を測り、大部分が水田化され、西岸部の水沢市、胆沢郡方面の扇状地や沖積平野とともに、県内有数の穀倉地帯になっている。

江刺平野の東辺部は段丘崖になっているが、河岸段丘の発達は福瀬地区の一部を除いて著しく貧弱であり、西岸部の胆沢扇状地などに見られる大規模なものは見られない。いずれこの段丘部のさらに東方には北上山地西辺をなす丘陵地や山地が続いているが、その最高部は江刺市東側境界域に位置する物見山頂で、海拔870.6mを測る。広瀬、人首、伊手などの諸河川は江刺平野を流れ、北上川に注ぐ小河川であるが、その源はいずれもこの江刺市東辺の境界域に発している。

江刺平野は北上川やその支流の上記河川と奥羽脊稜山地帯から東流する同じ支流の胆沢川などの度重なる氾濫によって形成されたものである。そのため、この平野の中には、上記の各河



第2図 江刺平野付近の地形分類概念図

川の旧河道が、周囲の平坦面より1m内外低い帯状の低地帯になって各所に走っており、さらにそれに付随する形で比高1~2mの島状の微高地が数多く散らばっている。現在、微高地上は一部水田化されているものの、畠地や宅地として利用されるところも多い。特に宅地は大部分が微高地上に集中し、そこを中心に各集落が形成されている。鴻ノ巣館遺跡もこの様な微高地上に立地しているが、現在は稗田集落の中心部になっている。

3. 周辺の遺跡（第3図、第1表）

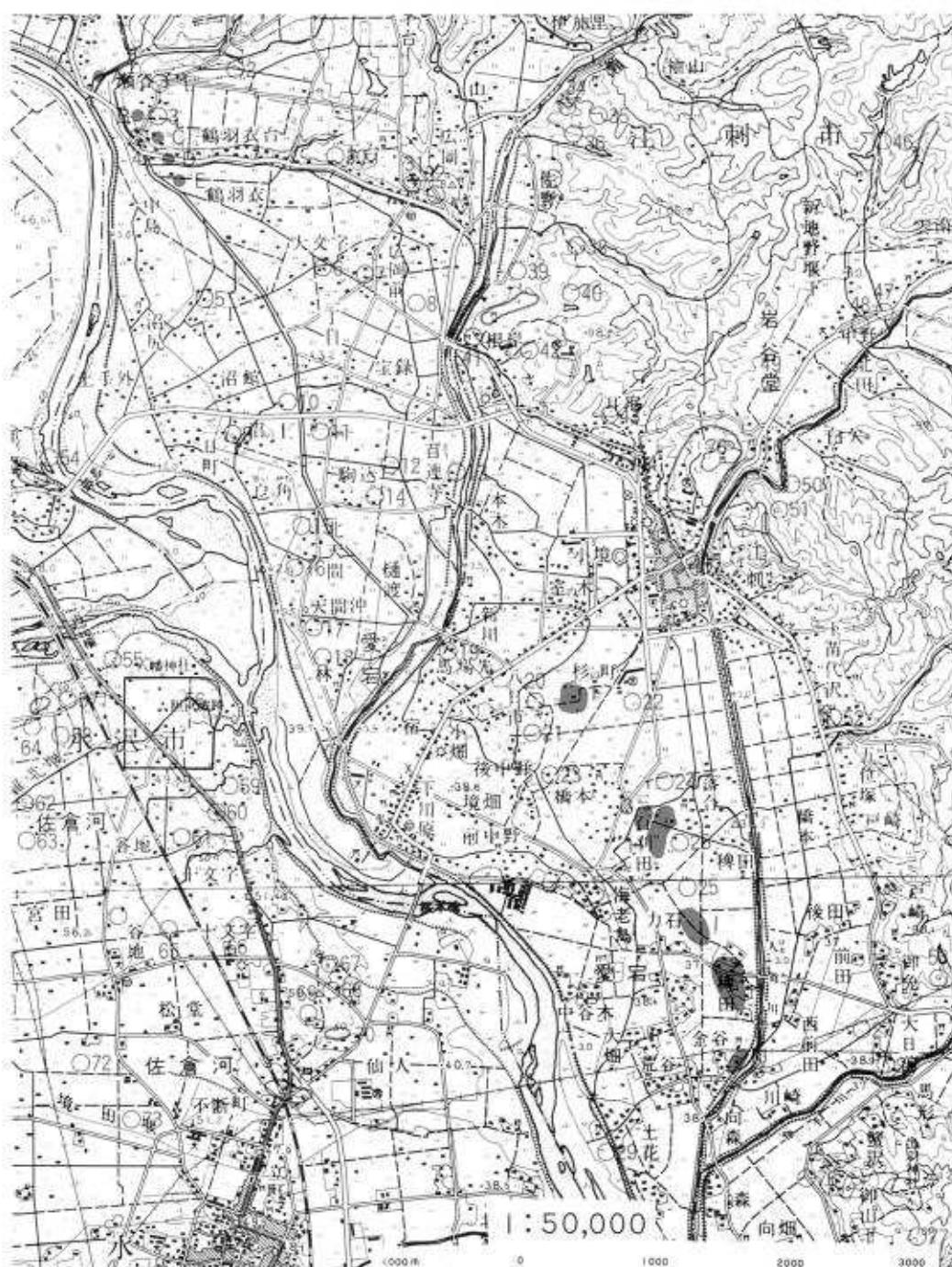
鴻ノ巣館遺跡のある江刺平野は、近年までしばしば水害に見舞われた地域であるが、平野の各所に散らばる微高地は冠水する機会も少なく、古くから人間活動の場として利用されてきたものと思われる。そのためここには、鴻ノ巣館遺跡以外にも現在までに38ヶ所に上る遺跡が知られている。⁽⁷⁾ その大部分は原始、古代の遺跡であるが、そのうち最も古い遺跡は先に報告された五十瀬神社前遺跡⁽⁸⁾で、縄文時代中期の遺物が出土している。今までのところ、それより古い時期の遺跡は江刺平野の微高地上には知られていない。それ以降の遺跡としては、沼の上や力石などの弥生時代の遺跡が3~4ヶ所知られているものの、大部分は奈良時代後半期以降、特に平安時代に中心を置く遺跡である。鴻ノ巣館遺跡に近接する中屋敷、力石、兔、落合I、II、III、朴ノ木、宮地などの各遺跡も、ほとんどこの時期の遺跡である。

上記の遺跡以外にも、江刺平野周辺の台地や丘陵地の辺縁部には縄文時代以降の多くの遺跡が知られている。その中には、藤原清衡が一時本拠地を置いたとされる豊田館の擬定地⁽¹⁸⁾が、江刺市岩谷堂地区の餅田⁽¹⁹⁾にあり、また、岩谷堂の市街地北方の高台には、中世から近世にかけてこの地方を支配した江刺氏や岩城氏が本拠を置いた岩谷堂城跡がある。さらに、同市稻瀬地区の台地一帯には瀬子谷古窯跡群⁽²⁰⁾が散らばっているが、この古窯跡群は胆沢城跡やその周辺の集落跡に瓦や須恵器を供給した、県内最大の窯業集落遺跡である。その他、瀬子谷古窯跡群のさらに北方の北上市稻瀬町には、縄文時代中期の樺山集落跡や、定額寺「極楽寺」⁽²¹⁾に推定される極楽寺遺跡群⁽²²⁾がある。

以上は、北上川東岸部の遺跡であるが、西岸部の水沢市、胆沢町、金ヶ崎方面にも、原始、古代から中世に致る多くの遺跡が分布している。その中には縄文時代の里塙集落跡、弥生時代の常盤広町、橋本の両遺跡、本邦最北の前方後円墳として知られる古墳時代の角塙古墳⁽²³⁾、及び同時代の高山、西大畑の両集落跡、奈良~平安時代の石田、今泉、膳性の各集落跡及び胆沢城跡⁽²⁴⁾、それに中世の館山遺跡などの各著名遺跡が含まれている。

この様に江刺平野を含む、胆沢、江刺地方には各時代、各種の遺跡が知られているが、この

鴻ノ巣館遺跡



- A. 谷地遺跡
- B. 五十瀬遺跡
- C. 渓谷子遺跡
- D. 鶴羽衣台遺跡
- E. 鶴羽衣遺跡
- F. 宮地遺跡
- G. 落合日遺跡
- H. 落合I遺跡
- I. 力石遺跡
- J. 鴻ノ巣館遺跡

第3図 鴻ノ巣館遺跡周辺の遺跡分布図

第1表 鴻ノ巣館遺跡周辺の遺跡地名表

番号	遺 跡 名	時 期	番号	遺 跡 名	時 期
1	瀬谷子窯跡群	平安	40	庚申	不明
2	稻瀬古墳群	不明	41	根宝	縄文・平安
3	葛ノ木島尻	平	42	性寺	縄文中～晚期
4	中島	安	43	耳男館	平
5	沼	々	44	力下山	々
6	十	々	45	松寺	明
7	大文	不平	46	万金	々
8	宝	明	47	中坊	晚
9	沼の上	安	48	天古	期明
10	沼別當	世	49	四手丘	々
11	東間	安	50	古染寺	々
12	百蓮寺	文	51	古染寺	安
13	駒込	安・中	52	豊田館	明
14	北天間(1)	世	53	石	安
15	北天間(2)	安	54	白	明
16	阿弥陀堂跡	々	55	八	安
17	林	々	56	胆沢城	縄文・奈良・平安
18	馬馬堂先	々	57	玉貫	々
19	觀音堂沖	I	58	膳權現	奈良・平安
20	杉の町	II	59	權現	々
21	田谷城跡	縄文後期・平安	60	竈伯	明
22	橋本(朴ノ木)	中	61	濟寺	文
23	兎	平	62	子	安
24	見御分免	世	63	獅鼻	中
25	松川	安	64	玉	世
26	四丑	弥生・平	65	東大輔	々
27	鶴羽衣櫛擬定地	不	66	八河原	明
28	稻瀬中学校	々	67	下根瓦	晚
29	稻瀬小学校	不	68	桐河原	期
30	大迫山居	明	69	瓦	縄文
31	佐野山古墳	安	70	河原	々
32	寺岡	明	71	下幅里	明
33	神明館古墳	安	72	水沢	文
34	坂橋	明	73	新商業跡	中
35	古兵衛乱塔塚	不	74	鹿谷	晚
36	根岸洞窟	縄文	75	愛宕	安
37		中	76	神社	期
38		期	77	谷	安
39			78	城跡	近世

鴻ノ巣館遺跡

事は、当地方に於ける人間活動の歴史の古さを示唆する一つの証拠といえよう。

注記

- (1) 江刺市の概況については、下記の文献による。
江刺市 1975 市勢要覧「えきし」1975年度版
岩手日報社 1977 「岩手年鑑」昭和53年度版
岩手県 1976 20万分の1地形図「岩手県」
- (2) 経済企画庁 1974 20万分の1土地分類図「岩手県」
中川ほか 1963 北上川中流域沿岸の第四系および地形—北上川流域の第四紀地史 (2)—「地学雑誌」第69巻、第812号 日本地質学会
日本地質学会 1973 「北上川低地帯の鮮新統第四系地形」
- (3) 東京天文台編 1978 「理科年表」1978年度版 丸善
佐鳴ほか 1973 「北上川」第一輯 東北地方建設局岩手工事事務所
- (4) (2)と同じ文献による。
- (5) 江刺市付近の地形地質に関しては、(2)の文献以外、下記の資料が参考にした。
経済企画庁 1963 土地分類調査「水沢」
岩手県 1975 土地分類調査「北上」
江刺市理科教育研究会他編 1971 「江刺市の地学」 江刺市教育委員会
- (6) この微高地は従来一律に、自然堤防と見なされていたが、佐鳴与四右衛門氏らによると、この中には沖積段丘に相当する微高地が含まれているという。また、洪水によって反復形成された広大な微高地は、河川に沿って細長く形成される、いわゆる自然堤防とは、成因を幾分異にし、近世の古文書ではしばしば「居掛」^{いがけ}という言葉で表現されているという。
- (7) 岩手県教育委員会 1974 「岩手県遺跡分布地図」
同 上 1973 「岩手県埋蔵文化財包蔵地一覧」
- (8) 同 上 1979 「東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書」 I
- (9) 伊藤鉄男 1973 「沼ノ上遺跡調査報告書」 江刺市教育委員会
岩手県埋蔵文化財センター 1978 「江刺市沼の上遺跡」
- (10) 同 上 1979 「主要地方道一閣・北上線関連遺跡発掘調査報告書」
- (11) (8)と同じ文献による
- (12) (10)と同じ文献による
- (13) (8)と同じ文献による
- (14) 岩手県教育委員会 1980 「東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書」 VI
- (15) (16) (10)と同じ文献による
- (17) 岩手県教育委員会 1980 「東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書」 IV
- (18) 岩手県教育会江刺郡部会 1925 「江刺都志」
- (19) 大川清ほか 1969 「岩手県江刺市瀬谷子窯跡群緊急調査概報」 江刺市教育委員会
同 上 1970 「岩手県江刺市瀬谷子窯跡群第2次緊急調査概報」 同 上
草間俊一ほか 1972 「瀬谷子遺跡第3次緊急調査報告」
- (20) 板橋源ほか 1957 「胆沢城跡」 岩手県教育委員会

- その他 1974年以降の各年度調査概報
- (21) 北上市 1968 「北上市史」第1巻 原始・古代(1) 北上市史刊行会
- (22) 板橋源ほか 1972 「北上市極楽寺跡」 北上市教育委員会
- (23)(24)(25) 水沢市 1974 「水沢市史」第一巻
- (26) 小岩末治 角塚古墳を語る 1951 「奥羽史談」第4号 奥羽史談会
- 林謙作ほか 1974 「角塚古墳」 胆沢町教育委員会
- (27) 高山遺跡調査会 1975 「高山遺跡」 水沢市教育委員会
- (28) 岩手県教育委員会ほか 1974・1975 「西大畠遺跡発掘調査現地説明会資料」第1次・第2次
- (29) 同 上 1975・1976 「石田遺跡発掘調査現地説明会資料」第1次・第2次
- (30) 同 上 1975 「今泉遺跡現地説明会資料」
- (31) 岩手県埋蔵文化財センター 1978 「勝性遺跡現地説明会資料」
- (32) 金ヶ崎町永岡地内にある、柏山氏の居館を含む城下集落遺跡。その一部にレクリエーションセンターの建設が行なわれることになり、1979年度に岩手県教育委員会の手で調査されている。

II. 調査の方法と経過（第4図）

1. 調査の方法

調査に当っては、東北新幹線の建設予定地内を可能な限り、全面発掘調査する事にし、具体的な作業は、すべて序文2に述べた方法に準じて実施した。

調査時の平面測量基準原点は新幹線ルート中軸線上の東京起点430,560km地点上に設け、FA50と名付けた。さらにFA50と同じルート上の東京起点430,520km地点を結ぶ直線を想定し、その延長線を平面測量基準中軸線とした。この中軸線と正方位のそれはN15°49'10"Wである。以下、FA50とこの中軸線を中心に、調査区域全体を30m区間毎に地割区分し、その各々のブ

鴻ノ巣館遺跡

ロック全体をさらに、3m×3m単位の方眼網（グリッド）に細分した。

また、高度測量の基準高度は、遺跡全体の高度差を考慮し、海拔37.00m、及び海拔36.50mその他を採用し、全体の統一を図る様努めた。（図中に示したもの以外海拔37.00m）

2. 調査の経過

〔1〕 調査に致るまでの経過

鴻ノ巣館遺跡は力石遺跡のすぐ南側に、低地を挟んで隣接する遺跡であるが、昭和47（1972）年の東北新幹線建設予定地内の遺跡分布調査によって、平安時代の遺物散布地として新たに登録されるまでは、「江刺郡志」などに見える「鴻の巣」^{〔注2〕}伝承地として、わずかの識者に知られていたに過ぎなかった。今回の報告で用いる遺跡名も、実はこの伝承に由来し、中世の城館遺構の存在を予想した、当時の調査者が命名したものである。

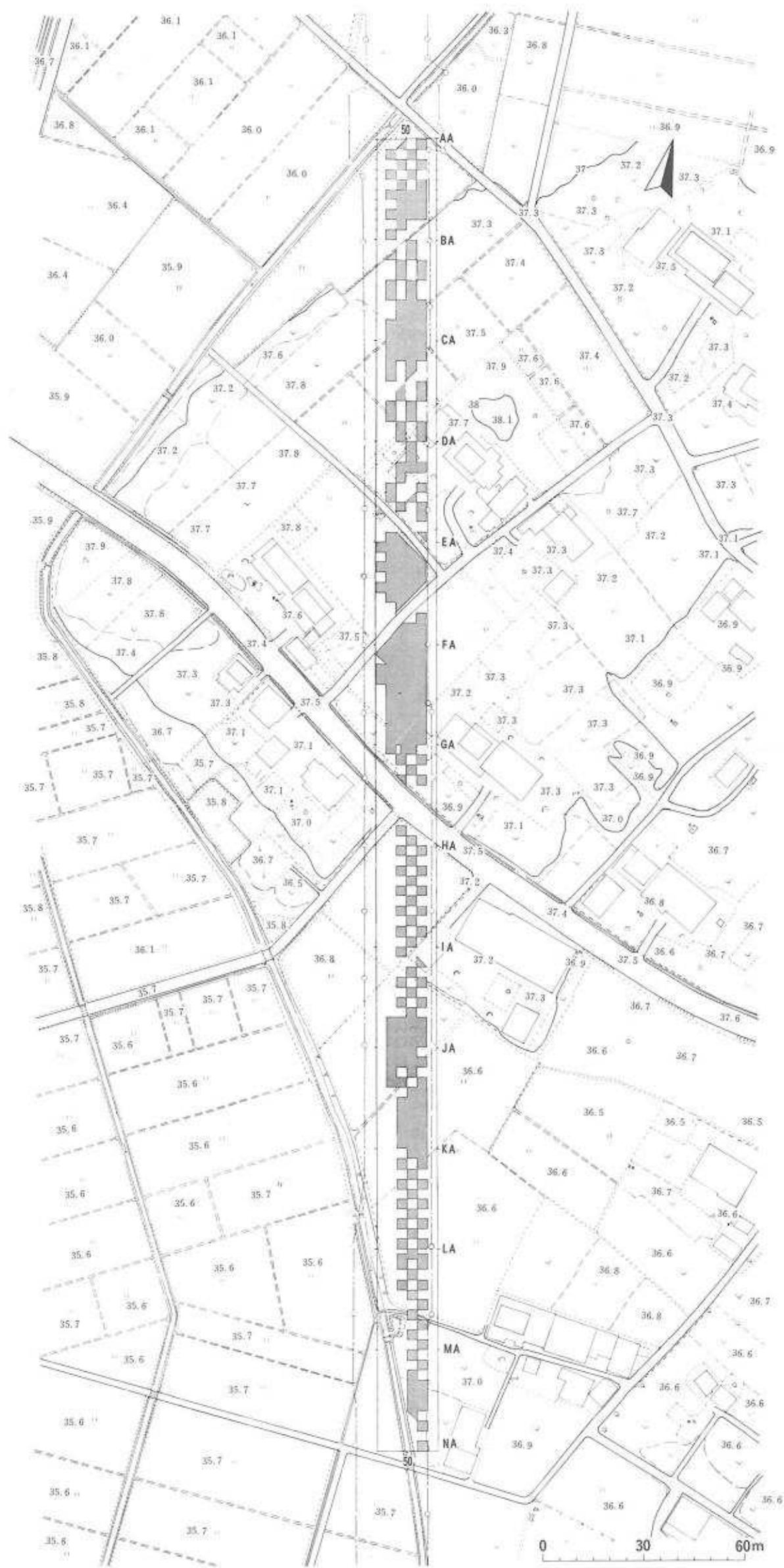
〔2〕 遺跡の範囲と現状

遺跡の範囲は、昭和47年度の分布調査の際に、稗田集落の中心部の乗る微高地全域、総面積約21,000m²の区域が想定されている。東北新幹線はこの遺跡想定区域のうちの西側部分を、南南東—北北東方向に分断する形で通過するが、今回の調査は、この新幹線通過予定地全域、全長約390m、巾約20m、総面積6,400m²の範囲を対象に実施したものである。

調査区付近は、現在稗田集落の中心部に位置しているため、一部に水田が見られるものの、大部分は宅地や畠地になっている。現在のところ、この付近では大規模な宅地造成工事や土木工事が行なわれていないので、遺跡全体の急速な破壊は進行していないが、遺跡立地の性格上長期に渡って、小規模な破壊が繰り返されてきた事が予想された。

〔3〕 調査の経過

調査は昭和49（1974）年6月24日から同年10月24日までの約4ヶ月間に渡って行なわれた。まず6月24日には、調査区域の中央部付近に作業小屋を建設し、午前中器材の搬入整理作業を行なった。併せて、調査区域内の雜物撤去作業を行ない、午後からは測量杭の打ち込み作業を始めた。以後、杭打ち作業を、必要に応じて7月18日まで断続的に行なった。杭打ち作業と一部併行する形で、遺構の検出のための粗掘り作業を6月25日から始め、10月4日まで断続的に行なった。遺構検出作業は、当地方特有の、判別の難しい遺構埋土と地山層に遭遇したため、著しく難行した。この間に、検出された各遺構の調査を8月9日から始め、10月24日まで行なった。さらに前記の各作業と関連して、土層観察用トレーンチの掘削を行ない、その調査を6月25～26、7月2、7、13～19、22、8月21の各日に実施した。



第4図 鴻ノ巣館遺跡グリッド配置図

以上の様な経過をたどって、10月24日に調査の全予定を終了し器材を撤収した。その後、同月26日に、地元住民及び一般研究者を対象に現地説明会を開催し、調査成果の一部を公開した。

調査期間全般を通じて悩みだった事は、他の調査のスケジュール等とのかねあいで、調査に要する調査員や経験豊富な作業員を、適時に適正な規模で確保できない事であった。そのため一般作業員の他に遺構実測作業員として、夏期休暇で帰省中の大学生2名の協力を得たりしたが、全体的に作業は遅れがちで、結局は、調査終了までに4ヶ月という長期間を要する事になった。

なお、当初の予定では、工事用道路の予定地の調査も合わせて行なう事になっていたが、調査開始時に南方のG～M区に、既に工事用道路が敷設されていた。そのため、工事担当者の伊藤組に道路部分の土石の排除を申し入れたところ、同組からは工期の関係で、工事用道路の撤去はむずかしいという解答を得た。そこで、意見調整を図るべく、両者で協議を行なったところ、伊藤組の方から工事用道路部分に対して、今後、掘削その他の土木工事を一切行なわないという確約が得られた。以上の様な理由により、G～M区の西側の一部を調査対象から除外する事にした。

注記

(32) (18) に掲げた「江刺郡志」のP. 339、第11章伝説、愛宕村の項に、鴻の巣として、「愛宕村にあり。鴻ノ巣若狭と称する落人の居りし所。後耕田に移りしと。それより同地には鴻ノ（高野）の姓を称ふるもの多し」という記事が見える。

III. 調査の成績

1. 基本層序（第2、5図）

鴻ノ巣館遺跡の乗る微高地は最高所で海拔37.7m、平均海拔36～37mを測る、比高0.7～1.6m内外の平坦地である。地形の旧状は、開田工事、その他の土木工事によって、かなり大きく改変されているものの、ほぼ、復元できる状態に維持されていると言える。

微高地の基盤には、江刺平野内の他の多くの微高地と同様、第三紀の泥岩、砂岩、礫岩などの堆積岩層が広がっている。第三紀層の上には多くの場合、厚い礫層が堆積しているが、

鴻ノ巣館遺跡

微高地はこの礫層上に形成されたものである。今回の調査では、微高地表層部の土層堆積の状況を知るために、調査区内に 6ヶ所の土層観察トレンチを設けた。各トレンチ内の土層堆積状況は第 5 図 1 に示した通りである。⁽³³⁾

図でもわかる様に、遺跡付近の上部表層土は厚さ 0.5~0.9m の褐一暗褐色のシルト質軽埴土層よりなるが、その最上部は田畠の耕作により著しい擾乱を受けている。軽埴土層の下には、粒子の大きさや成分を異にする何枚かの砂、シルト、埴土などの互層が続いている。各層の層厚や堆積状況は場所によって、かなりの変化が見られるが、概して、北部では、砂層が卓越し、南部にゆくにしたがって埴土と砂の互層が卓越する傾向が見られる。以上の各層の下には、先に述べた、基底礫層が広がっているものと予想されるが、今回実施された、深掘りの範囲では、HG50 グリッドの地下 1.6m 付近のところに、その上辺部と思われる礫層が検出されただけで、ほとんど確認できなかった。

以上の様な土層堆積状況の観察の結果、この微高地の原形が、度重なる河川氾濫によって形成され、肥大して来た事が知られた。これらの土層のうち、人間生活の痕跡の認められる土層は主として 1~3、8、10、18、36 などで代表されるシルト質軽埴土層である。そのうち、1、10、36 などは、近世以降の遺物が主に含まれる擾乱層である。それ以外の 2、3~8 などの層では、その上層部分に、平安時代の遺物が含まれている。さらに、平安時代の遺構の多くも、1 層などの表土層とこれらの層の境界部付近で検出されている。以上の事から推測すると、平安時代の生活面は、擾乱を受ける以前の 1 相当層中か、その下部境界付近に存在していたものと推定される。なお、これらの層より下層では、遺構埋土を除いて、どの層からも人間生活の痕跡を確認できなかった。

注記

(33) 川崎地質株式会社 1972 東北新幹線地質調査報告書「東京起点 429K 000M~441K 000M 間」(国鉄盛岡工事局蔵本)

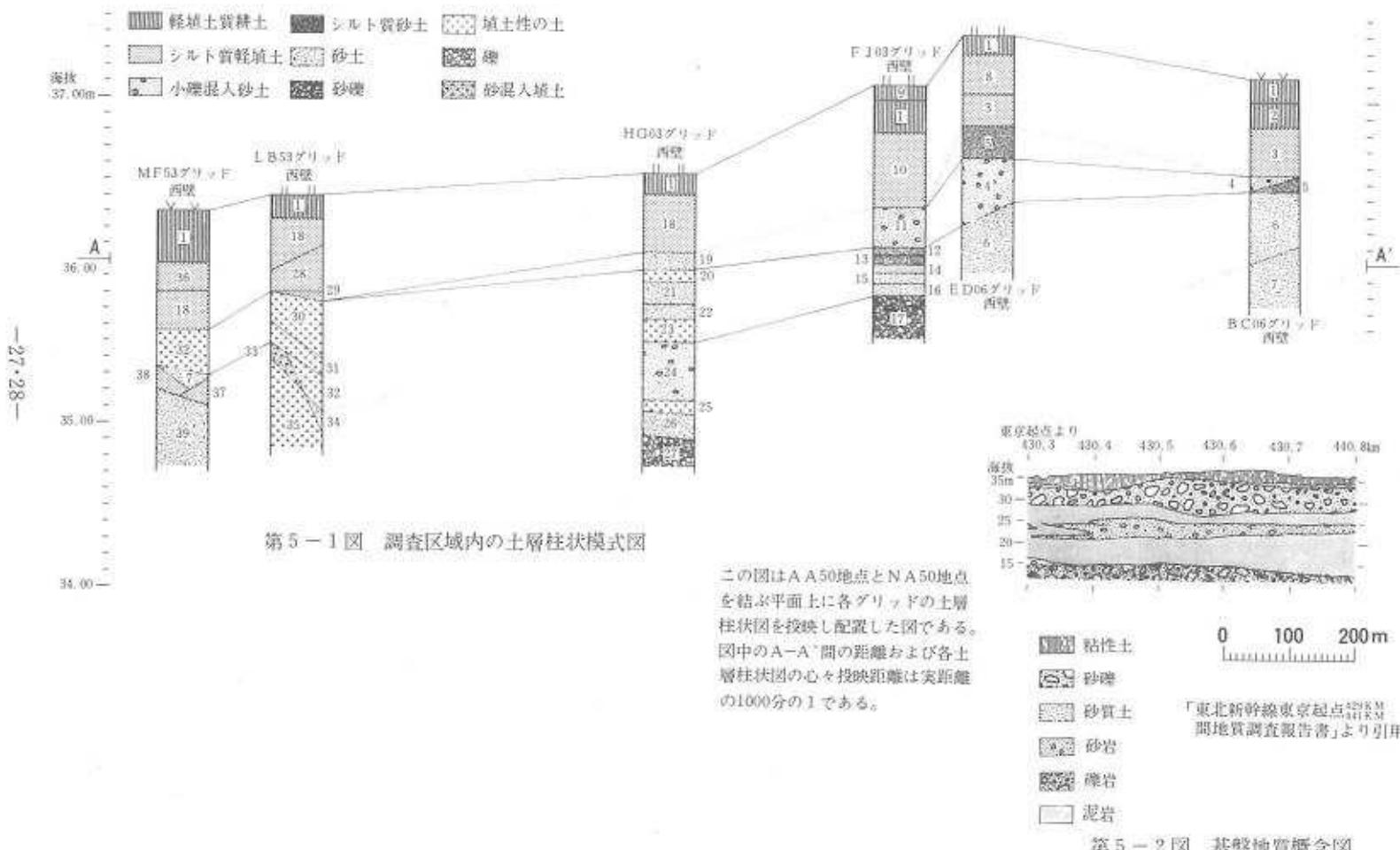
(34) (6) でも記した様に、この様な地形は古文書中では「居揚」^{ハヤヒ}と呼ばれている。

2. 発見された遺構と遺物

[1] 発見された遺構の種類と数及び遺物の種類 (第 6 図)

今回の調査で発見された遺構の種類と数は以下の通りである。(但し、住居跡など各遺構に付属すると推定されるピットなどはその数に含まない。)

住居跡類10
------	---------



第5-1図 調査区域内の土層柱状模式図

この図はA-A'地点とB-B'地点を結ぶ平面上に各グリッドの土層柱状図を投映し配置した図である。図中のA-A'間の距離および各土層柱状図の心を投映距離は実距離の100分の1である。

「東北新幹線東京起点430.3km
周辺地質調査報告書」より引用

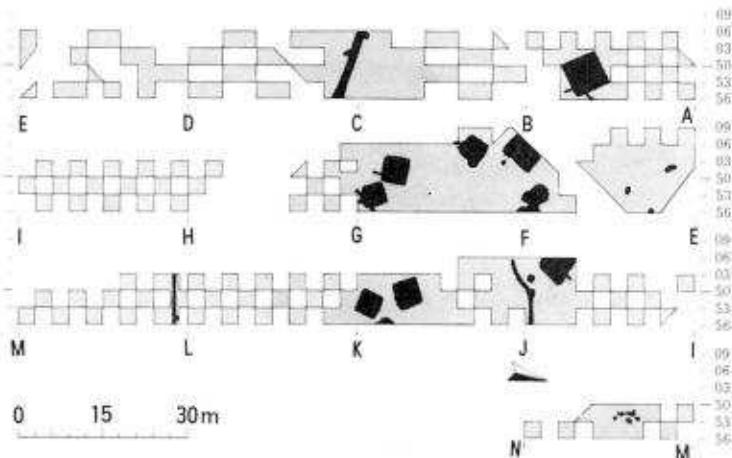
第5-2図 基盤地質概念図

層	土色	土性	特徴
1	暗褐	シルト質粘土	やや小石、砂を混える。
2	・	シルト質粘土	1と同じ、但し小石が少ない。
3	灰黄褐	シルト質壤土	やや擾乱され、植生根が見られる。
4	褐	砂土	径10cm以下の小石を含む。
5	・	砂質シルト	
6	灰黄褐	粒子の粗い砂土	
7	褐	粒子の細い砂土	
8	・	シルト質軽埴土	1と同質の土であるが色が異なる。
9	オリーブ	シルト質軽埴土	砂利が少量混入。
10	暗褐	シルト質輕埴土	炭化物、土器片、砂、小石混入本根多し（擾乱土）
11	・	砂土	4と同質。
12	褐	砂質シルト	
13	・	砂質シルト	12より砂の粒子が粗い。
14	・	シルト	
15	・	細砂	
16	・	砂	11と15の中間の粗さの砂よりなる砂土。 径0.5~8cm大の礫と砂の混合。
17	暗褐	砂礫混合	
18	褐	シルト質軽埴土	
19	暗褐	やや粒の粗い砂	水酸化第二鉄の沈着あり。
20	にぶい黄褐	シルト質埴土	
21	褐	粒の細かい砂	
22	・	シルト～微砂漸移層	水酸化第二鉄の沈着あり。
23	にぶい黄褐	シルト質埴土	径0.5~2mm大の粗砂層、小石が混入。
24	黒	石まじり粗砂	水酸化第二鉄の沈着あり。
25	にぶい黄褐	シルト質埴土	粒子の粗い砂層。
26	黒褐	砂	やや粒子の細かい礫よりなる。
27	黒暗褐	礫	
28	明褐	シルト質軽埴土	
29	にぶい褐	シルト質軽埴土	
30	明褐	埴土	
31	褐	シルト質埴土	3、6への漸移層、31より粘土分が少ない。
32	灰黄褐	シルト質埴土	
33	褐色	砂質埴土	
34	灰黄褐	砂	
35	灰	シルト質埴土	植生根多く、粘りがやや強い。
36	灰黄褐	シルト質軽埴土	やや粘り弱い。
37	・	シルト質軽埴土	植生痕が明赤褐(10YR%色)のしみになって残る。
38	・	シルト質軽埴土	
39	黒褐色 -暗褐	粗砂層～透水層	

第5図 鴻ノ巣館遺跡調査区域内の土層柱状模式図・基盤地質概念図

平面の直径	4.5m × 3.2m 大の大型のピット類	1
平面の直径	1~2.5m × 1~2m 大の中型のピット類	10
平面の直径	1m × 1m 未満の小型のピット類	8
溝類		6

以上の各遺構からは、多くの場合、平安時代のものと思われる焼物類の破片が多数出土しており、同時期のものと思われる鉄器類や砥石、土製品なども少數出土している。その他、遺構検出作業中に、上記の遺物と同時期の遺物に混じり、近世以降の焼物類の破片や金属器類などが少數採集されている。



第6図 鴻ノ巣館遺跡発掘調査区域内の遺跡

(2) 古代の焼物の分類基準について(第7、8図、第2表)

発掘調査報告のごく普通の進め方からすれば、まず、個々の遺構や遺物の事実記載をした後に、遺物分類等の記述に入ってゆくのが正式であろうかと思われる。しかしながら、紙巾の関係上、本報告では記述を簡略化するため、順序を逆にして、まず出土遺物、その中でも特に出土点数の多かった、古代の焼物類の分類基準について述べる事にしたい。

一般に各種、各時代の遺跡や遺構に伴う遺物は、その遺跡や遺構の所属時期やそこに暮らした人間の生活実態と変化の様子を具体的に復元推定する上で、非常に重要な手掛りである。その意味で、今回の調査で住居跡など主要遺構から出土した古代の焼物類は、他の共伴遺物の出土点数が極端に少ない事と相俟って、最重要の遺物と考えられる。

この焼物類は大部分が従来の研究から平安時代に属すると考えられている、須恵器や土師器などの素焼きの焼物類である。その中には成形、調整技法、焼成技法、それに器形の異なる幾つかのグループが含まれている。そのグループ組成は後述される各遺構の事実報告の項でも知

鴻ノ巣館遺跡

られる様に、遺構別に若干の異同が見られる。この様な異同はある程度、各遺構の時期とか性格、ないしはそこから暮らした人間の生活の実態を反映したものと考えられる。そこで今回の調査で出土した焼物類の整理に当っては、この点を究明すべく、主として成形、調整技法、焼成技法、器形の三つの特徴に着目し、出土資料全般に渡り分類を試みた。その結果、今回出土した焼物類は後述するA～Jの10群に大別され、さらに各群毎に形態や細かな技法上の違いにより幾つかの細分がなされた。その具体的な分類基準および器種の図形は第3表および第4、5図に示した通りである。以下图表に掲げた事を中心に、各器種毎の分類基準の補足説明を行なう。(なお文中で焼物と云う場合、特に断らない限り、焼物の容器類を意味している。)

A群

器壁が底部から口辺部にかけて直接的に開く、ロクロ成形された、いわゆる壺類である。一部に皿状の器形を含み、その他にも形狀には幾つかの変異が認められるが、今回得られた資料の中では概して器高が低く、器壁が緩く内窓しながら外開きする個体が多い。以上のA群は焼成および調整技法上、さらにI～IVの4つのグループに分類された。なお、A群として分類し得る資料の中には、落合I遺跡の様に二次的に高温にさらされ焼きぶくれした壺や、脱色した壺の混入も予想されたので、予め前者をAa、後者をAbとして別に分類項目を設定した。

I類：A群の焼物類のうちで、内面ないし内外面ヘラ磨きされ、黒色処理されグループで、焼成技法上、從来土師器として分類されている、酸化炎焼成された、軟質土器類である。黒色処理されない器面の色調は橙色～に近い橙色系のものが多く、胎土中に含まれる砂の量は概して少ない。

I-1類 I類のうち、内面のみヘラ磨きされ、黒色処理されたグループで、その外面底部が回転糸切りされ、底部やその周辺部に調整の行なわれていないタイプのものである。このタイプの器種はさらに、器壁の形狀の違いにより、器壁がやや内窓気味に外傾するタイプIa₁と、直線的に外傾するタイプIa₂に分けられる。

I-2類 I-1類と同一技法で成形、調整された壺類であるが、底部やその周辺部が手持ちヘラ削り調整されたグループ2a、ロクロないし回転台を使用してヘラ削りされたグループ2bの二者に細分される。両者ともさらに形態上の違いから、各々、器壁が比較的大きく外開きするもの-2a₁、2b₁、器壁の立ち上がりがやや急なもの-2a₂、2b₂、など幾つかのタイプに細分し得る。いずれ今回各遺構内から出土した壺類の中ではこの種のものが最も多かった。

I-3類 I-1類と同一技法で成形・調整された壺類であるが、底部の切り離し後に高台の付けられたタイプのものである。3類はさらに壺本体部分の形態によって、壺部の器高の大きい楕状のタイプ-3a、器高が小さい皿状タイプ-3b、の二種に細

分される。さらに3-aのタイプは、高台部が直立気味で小さく付くもの—3a₁、高台部がやや大きめで外開きするもの3a₂に分けられる。また3-bタイプは环部の器壁が内弯気味に開くだけのもの—3b₁と口辺部がやや外にまくれ出すもの—3b₂などに細分される。

I-4類 I類のうち、内外両面ともヘラ磨きされ、黒色処理されたグループである。このグループは出土点数も少なく、器形の全形を伺える資料も少なかったので、その形状の詳細は不明である。ただ破片や実測可能資料から総合的に判断すると、形態上少なくとも、高台のないタイプ—4-a、高台のあるタイプ—4-bの二種の存在が認められる。

II類 A群のうち、焼成技法上、酸化炎焼成された軟質土器類に含まれるグループであるが、黒色処理されていないタイプの環類である。その色調はにぶい橙色—黄灰白色系のものが多く胎土中に含まれる砂の量は個体によって寡多が見られるものの概して少ない。また器形に歪みのある個体が多い。このグループは、従来土師器に含められたり、土師質土器類ないしは軟質赤焼き土器類として分類されているが、その所属は必ずしも明確ではない。いずれこのグループの中には低火度焼成された須恵器のグループの混在する可能性も考えられる。以上のII類はさらに、下記の様な4つのグループに細分される。

II-1類 II類のうち外面底部に回転糸切り痕を有し、底面やその周辺部に調整の行なわれていないタイプのものである。この種の環は形態状の変化が多く、器壁が内弯気味に外傾するタイプ1a₁、やや器高が高く、器壁が直線的に開くタイプ1a₂、器高が低く、器壁が肉厚で直線的に開くタイプ1a₃、器壁の立ち上がりはやや内弯気味であるが体部の中—上部が、外に大きく開くタイプ1a₄など、種々の変化が見られる。

II-2類 II類のうち、底面やその周辺部にヘラ削りの施されたグループである。その出土点数は多くなく、観察された限りでは、ヘラ削りは全て手持ちで行なわれている。このグループは内面調整の有無により、無調整のタイプ—2-a、内面にヘラ磨きの施されているもの—2-bの二種に区分される。

II-3類 II類のうち、底面切り離し後、高台の付けられたタイプのものである。全形の知られる資料があまり多く出土していないため、その形状の詳細は不明であるが、高台部の形態の違いにより、I類の3a₁タイプの高台を有するもの—3a₁、I類3a₂タイプの高台を有するもの—3a₂、さらに前二者より高く、やや外開きする高台を有するもの—3a₃の3種のグループが、少なくとも認められる。

II-4類 II類のうち、成形、調整技法が1類と同じ、小型浅底の皿形環類である。

鴻ノ巣館遺跡

III類：焼成技法上、酸化炎焼成された須恵器ないし須恵器類似の硬質土器に分類されるグループである。全形の知られる資料があまり多く出土していないので、よくわからないが、大旨、II類の坏に類似した形態がそろっていると言える。その中でも、底部破片資料から伺う限り、II-1類に相当するタイプのものが多い様に見受けられる。その色調もII類と大体同じであるが、胎土中の砂の混入量は、II類と比べて少ないものが多い。

IV類：焼成技法上、明らかに従来須恵器と呼ばれていた土器の範疇に含められるグループである。このグループは、底部切り離し技法の違いにより、回転ヘラ切りのもの-1、回転糸切りのもの-2aの2グループに分類される。前者はさらに底部切り離し後に、底部とその周辺部にペラケズリを行なったもの-1aと底部にヘラ削りなどの調整を行なわないもの-1bの2者に分類される。後者は、観察された限りでは、底部やその周辺部に調整痕の認められるものは全く見られなかった。ただし、その器壁の立ち上がりの形狀によって、幾つかのタイプが予想された。いずれIV類は今回の調査ではあまり多く出土しなかった。

B群

器高が口径の1.5倍位ある小型のカメ類ないし、それに類似する器形のグループで、器壁は胴体上部でふくらみ、さらに口辺部近くでくびれ、口辺部は外開きをする。整技法及び焼成技法の違いにより、I-IIの3類に細分される。そのうち、I類以外の細片は、外見上次に述べるC類などと、明瞭に判別し得ない事が多い。

I類：B群のグループのうち、ロクロ形成され、内面がヘラ磨きされ黒色処理された、焼成技法上土師器に含められる一群である。その底部には回転糸切り痕を有し、ヘラ削りされた例もある。いずれ、全形の知られる資料が少ないので、この類の形狀の詳細は不明であるが、口辺部の破片資料をもとにして、形態別にさらに2類に細分された。

I-1類 脊の最大径が口辺部の直径と同じか、やや小さめにつくられたタイプのもので、この数はさらに口辺部の形狀の違いにより、折り返しのない、単純な口縁を有するもの-1a₁と折り返し状の口縁を有するもの-1a₂の2種に細分された。

I-2類 脊の最大径が口辺部の直径よりやや大きめのタイプで、カメ類に含めるにはやや疑問の持たれる器形であるが一応カメ類に含めた。

II類：B群のグループのうち、ロクロを使用せず、粘土紐の巻き上げないし輪積み技法によって成形されたタイプのものである。このタイプの小型カメの調整としては、口辺部の内外には横ナデがなされ、胴部外面には、縱方向のヘラ削りが施されている。内面には横方向の刷毛目状ヘラ削りの施される例が多く見られる。黒色処理やヘラ磨きは全く見られない。色調は橙～赤褐色系のものが多く、胎土中には、概して砂が多い。焼成技法上は、従来土師器とされている範疇に入るものが多いが、やや硬質の個体も一部に見られる。

II-1類 口径14~18cm、底径8cm、器高14~18cm内外のやや大きいタイプの小型カメであるこのタイプはさらに、口辺部の形状により、口辺部が大きく外に開くタイプ-1a₁、とあまり開かないタイプ-1a₂の二者に細分される。

II-2類 口径10cm、底径5~6cm、器高8~10cm内外のやや小さいタイプの小型カメである。この種のカメは概して頭部のくびれが、不明瞭である。

III類：B群のグループのうち、ロクロ形成されたグループで、底部には回転糸切り痕を有している。確実にIII類と見なし得るものの中では、底部周辺にヘラケズリが施されているものは、今までのところ確認されていない。色調は灰白~黄灰褐色系のものが多く、概してI、II類より硬質のものが多い。したがって硬さの面から見れば、A群III類に近似した個体が多いが、胎土中に含まれる砂は、A群III類より遠かに多い。

III類は一般にC群の土器などと同じく、出土破片数は比較的多いが、全形の知られる資料が少ない。そのため、器形の詳細な形狀は不明であるが、大体III-1類として一括できる。ただし、口辺部破片資料から見ると、いくつかの形態の違いが見られ、口辺部が頸部から単純に外開きするもの-1a₁、口辺部の上端部がやや立ち上がるも-1a₂、外開きする折り返し状の口縁のつくるもの-1a₃、やや内側に入り込んだ折り返し状の口縁のつくるもの-1a₄など、少なくとも4種のタイプが認められる。

C群

やや大型の長胴のカメ類である。このグループは破片資料が多く、その全体形狀については不明な点もあるが、やや形狀の知られるものについて見ると、これらのグループは一般に器高が高く、30cm内外を測る。その胴体上部は口径と同じか、それよりやや小さい程度に脹れ、その上がり少しくびれ、そこに短く外開きする口辺部がついている。概して、胎土中には砂が多く混入し、その器厚はA群、B群のグループと比べて厚目のものが多いが、薄手のものも見られる。C群は成形、調整及び焼成技法の違いによりI、IIの2類に大別される。

I類：C群のうち粘土紐の巻き上げないし、輪積みによって成形され、しかも、ロクロ調整の痕跡の見られないタイプの長胴カメ類である。色調は橙~赤褐色系のものが多く、硬さや焼成技法の点から、従来土師器として分類されている軟質の土器類が主体を占める。

器形は後述するII類に比べ、概して口辺部は短小で、くびれは弱く、多くの場合内外両面とも横ナデされている。さらに、形態及び調整技法上の差異により以下に述べる1a~1fの6種に細分された。

I-1a類 胴体外面中~上部に縱方向のヘラケズリ痕を有し、胴体内面に横方向のナデつけがなされたものである。

I-1b類 I-1a類とほぼ同様の技法によって調整された長胴カメであるが、ナデつけが縱

方向に施されるタイプのものである。

I-1c類 胴体外面、口～上部の調整技法はI-1a類と類似しているが、胴体内面に横方向の刷毛目調整が施されているタイプのものである。

I-1d類 I-1c類と技法的に類似しているが、胴体中～上部のヘラ削り調整が、縦方向刷毛目調整の上に施されているタイプのものである。

I-1e類 調整技法的には、I-1c類に類似しているが、胴体内面に施される、刷毛目状の調整痕が浅く、軽くナデつけられた様な様相を呈するタイプのものである。

I-1f類 I-1a類と同様の調整技法を有するが頭部のくびれが、極端に弱いタイプのものである。

II類：C群のうち、粘土紐の巻き上げないし、輪積みによって成形された後に、胴体上部から口辺にかけての仕上げが、ロクロないし、回転台を利用して行なわれているグループである。したがって、このグループの長胴カメの上半部には、特有の横方向のロクロナデ痕が見られる。さらに、このグループの長胴カメでは、ロクロ仕上げの後に、胴体上部下半から下部全体にかけて、縦方向ないし斜め方向にヘラ削り調整されるのが一般的である。胎土は、I類より概して硬質のものが多く、色調は橙色のものも一部に見られるが、鈍い橙～灰黃白色系のものが多く、焼成技法上B群III類と共通する要素が見られる。II類は調整技法の違いにより、少なくとも次に述べる1～3の3種類に細分される。

II-1類 II類のうち折り返し状の口縁を有し、胴体上部外面に平行線状の叩き目と縦方向のヘラ削りを共存させるタイプのものである。調整は、叩き→ロクロ仕上げ→ヘラ削りの順で行なわれたらしい。胴体の内面には横方向に走る刷毛目状のヘラ削りないしナデつけの痕跡が認められる。出土例はそう多くない。

II-2類 調整技法I類と近似しているが、叩き目を伴なわないものでんその中には口辺部の形態の違いにより折り返し状口縁のついたタイプ-2aと、頭部のくびれの弱い単純口縁のタイプ-2b、の2種が見られる。さらには2aタイプは、口縁部上端の形状により、口縁部上端がほぼ直立するもの-2a₁と、内側に入り込むもの-2a₂、やや外に開くもの-2a₃の3種に細分される。

D群

口径の割に器高が割合に低く、器壁が底部から口辺部にかけて大きく開く盤（大皿）の類である。その胎土には砂がやや多く混り、色調や硬さは今回出土した資料で見る限り、A群II類やC群I類と類似しているが、D群I類として单一グループにまとめられる。この群の細片はB、C、H、Iなどの各群の破片とほとんど区別できない。出土点数が少ないので、このグループの詳細な形狀は不明であるが、少なくとも、高台の無いタイプ-1、高台のあるタイプ-

2の2者が予想される。そのうち、やや形状の知られるI-2類について見ると、初期成形技法は不明であるがC群II類などと同様、体上部はロクロ仕上げされ、下部外面には斜め方向のヘラ削りが施されている。高台部は失なわれているので大きさは不明であるが、付け高台である。

E群

A群の坏類の器高を高くし、全体を大型にした様な、いわゆる鉢類である。確実に器形の知り得た資料は、いずれも内面がヘラ磨きされ、黒色処理された、焼成技法上土師器に属するものである。E群I類としてまとめられるこのグループはさらに、器壁の形狀の違いにより、1、2の2者に細分される。いずれも口辺部はロクロ仕上げされている。

I-1類 1類は器壁が幾分内弯氣味に外傾し、口縁上端が外にややまくれるタイプで、体部外面の下半には縦一斜め方向のヘラ削りが施されている。底部には切り離しの痕跡が見られず、成形時にロクロが使用されなかった可能性が大きい。

I-2類 器壁が直線的に聞くタイプであるが、体部下半—底部の資料が欠落しているので技法の詳細は不明である。

F群

従来、壺、ないしカヌに分類されているグループである。このグループでは、やや小さな口に、すんぐりした平底ないし丸底、肩張の胴体部がついている。焼成技法や硬さの面から見ると、そのほとんどが、須恵器の範疇に含まれるが、まれに、土師器と思われる器種も見られる。このグループは焼成技法の違いにより、さらに、I-IIIの3種に大別される。

I類 砂の多い暗褐色を呈する胎土からなり、焼成技法上、土師器ないし土師器類似の軟質土器に含まれるグループである。器形の大きさから云えば、F群のうちでは中型に属する。器面調整技法の詳細は破片数が少ないので不明であるが、胴体中下部には縦方向のヘラ削り痕が見られ、胴体上部にはロクロ調整痕が見られる。

II類 酸化炎焼成された、須恵器ないし、須恵器類似の直口の小型壺類である。成形は粘土紐の巻き上げないし輪積みによって行なわれている。その口辺部の内外両面には横方向のナデ痕が見られ、胴体部外面には、上端部で横方向、それ以下の部分では縦一斜め方向のヘラ削りがなされている。胴体内面の上端部付近には一部横方向のヘラ削りが施されているが、他の部分には指による横ナデの痕跡が認められる。

III類 焼成技法上、須恵器に含まれる還元炎焼成された灰色系の硬質の胎土を有するグループである。成形はII類と同様、粘土紐の巻き上げないし、輪積みによっているものと推定され、胴体部の器面には、器壁を叩き締めた際の各種の圧痕が残されている。また、口辺部には多くの場合、横ナデないし、それに類似した調整痕が残る。III類は器形の大きさの違いにより、1-3の3種に細分される。

鴻ノ巣館遺跡

III-1類 III類のうち、大型に属するグループで、丸底と思われる。今回出土した古代の焼物類の中では、最も容量が大きいグループである。このグループは胴体部器面に残る叩き目や当て痕の違いにより、胴体部外面に叩き目として縦方向の撲糸痕の残されるタイプ-1aと、平行線状の斜め方向の叩き目の残るもの-1bの2種にわけられる。いずれも胴体内面の当て痕は無文である。

III-2類 III類のうち、平底ないし丸底の中型のグループで、成形技法上はII-1類と同一である。全形の知られる出土資料が少ないため詳細は不明であるが、器面調整技法の違いにより、少なくとも3種に細分される。

そのうち、1つは丸底で胴体部外面に平行線状の叩き目を有し、内面の上半部に菊花状の当て痕を持つタイプ-2aである。2つ目は平底で胴体部外面に平行線状叩き目と縦一斜め方向のヘラ削り痕を共存させ、さらに内面に、菊花状の当て痕を、指によるナデつけで消し、胴体上部一口辺部にロクロ調整痕の見られるタイプ-2bである。3つ目は、丸底ないし、平底で、胴体外面に縦一斜めのヘラ削り痕を有し、内面に指による縦ないし横のナデ痕を有するもので、胴体上部一口辺部内外両面にロクロ調整痕の見られるタイプ-2cである。

III-3類 III類の中で小型に属する器形である。その全形は資料が少ないので不明であるが平底と思われる。やや形状の知られる資料では胴体部に、ロクロ調整痕と縦方向のヘラ削り痕が見られる。

G群

球形の胴体部に外反する長い頸部のついた、いわゆる長頸の瓶のグループである。その口縁部は折り返し状の口縁になっており、底部には高台が付いている。胴体と口頸部は別々に作られ、後に貼り合わされ一つの器形をなしている。器面全体にロクロ調整時のナデ痕が残されている。胴体部下半にヘラ削り調整を伴なう例が宮地など他の遺跡では知られているが、今回出土した資料の中では確認できなかった。

なお、G群は色調が灰色系で、胎土中には砂がほとんど混入しておらず、焼成技法上すべて須恵器に含まれる。

H群

広口の浅い鉢とでも呼ぶべき器形のグループであるが、器壁外面に煤が付着しており、先に分類したE群とも用途が異なり、主として煮沸に供せられた器形と察せられる。そこで、一応この器形を独立させてH群として扱ったが、確実にこの器形に含まれる資料は少ない。

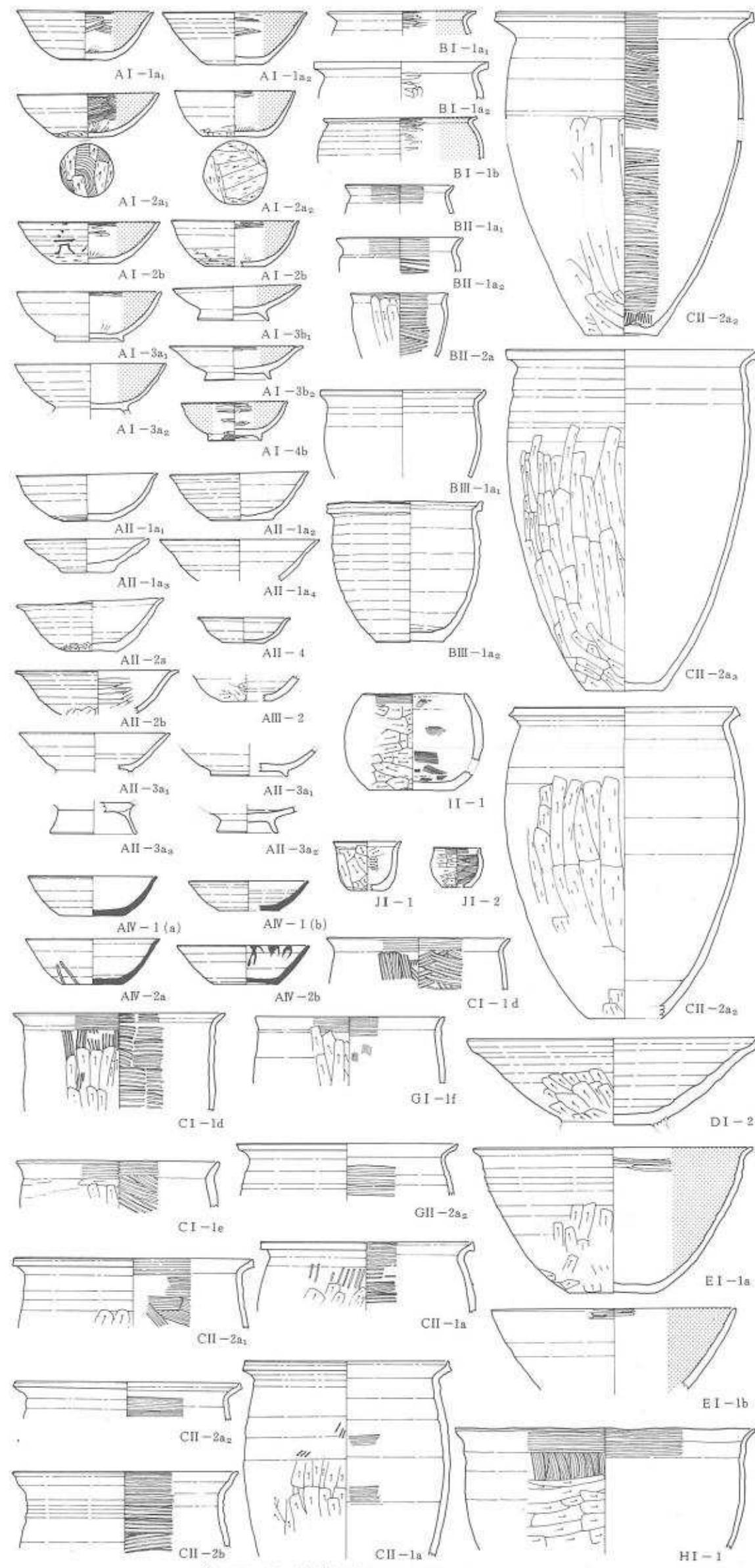
このグループは胎土中に砂が多く含まれ、焼成技法上土師器に含められ、H群I類として一

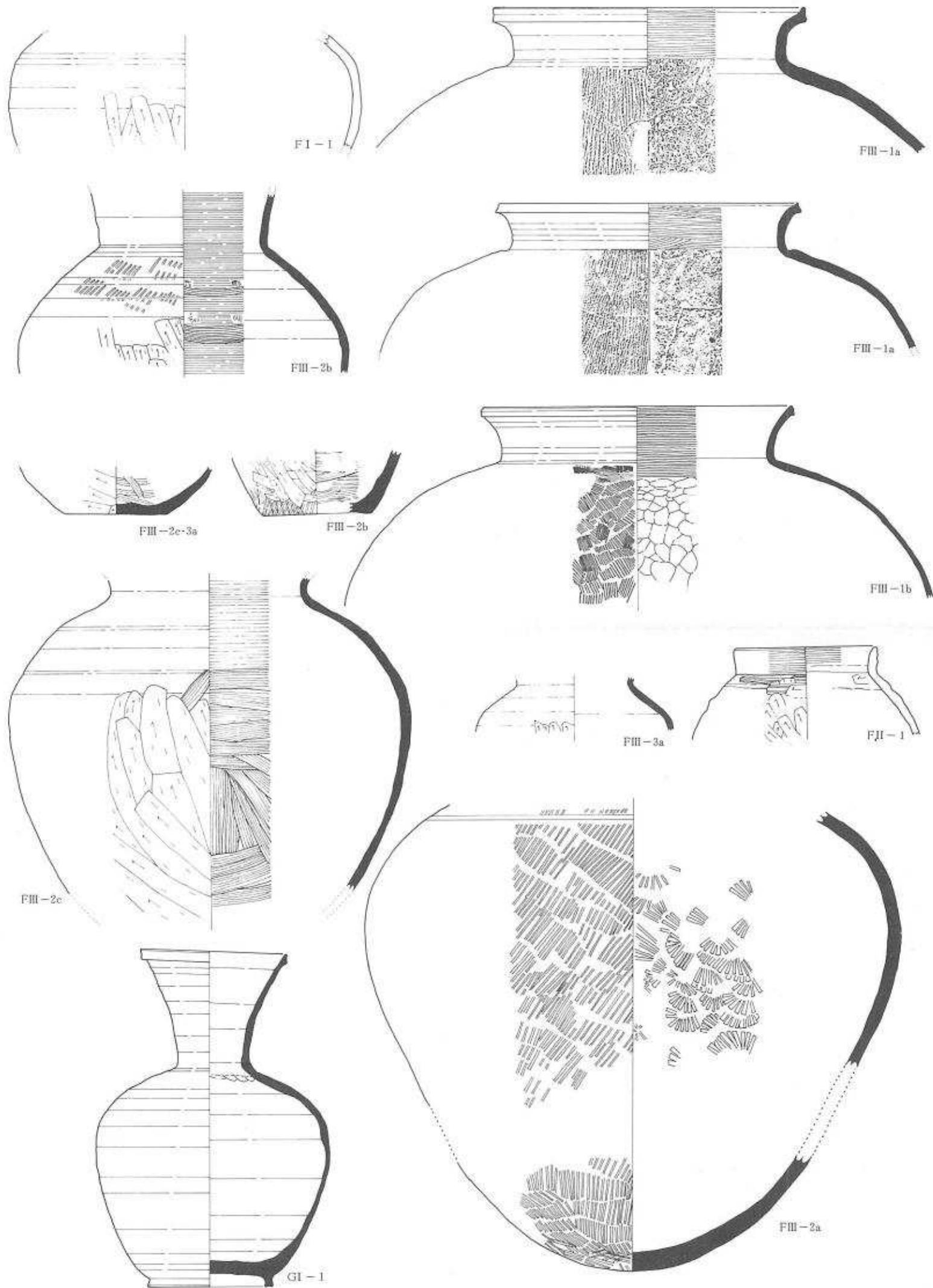
第2表 鴻之巣館遺跡出土の平安時代の土器類分類基準表

器種	分類記号	大きさ 口径×底径×器高	焼成炎 の種別	硬さ	推定される 主な成形技法	黒色 処理	袖	形態・調整技法上の主な特徴			出土数量					
								形態および外面調整		内面調整						
环	A I - 1 a	14~15×5~6×4~5	内外	軟	ロクロ水引	な	内	高台なし	外面底部回転余切り、無調整	内面、口辺一体部上半 横ないし斜めのヘラミガキ 体部下半～底部 放射状ヘラミガキ (口～底部が横ヘラミガキの 例もわずかにある。)	○					
	2 a							高台あり	外面底～周辺部手持ちヘラケズリ		○					
	2 b							高台なし	＊ 回転ヘラケズリ		+					
	3 a ₁							高台あり	深い楕状の环部		+					
	3 a ₂							高台なし	浅い皿状の环部		○					
	3 b ₁							高台あり	外面全体横ヘラミガキ		+					
	3 b ₂							高台なし	＊		+					
	4 a	11×5.5×4.0	内外	軟	ロクロ水引	な	内	高台なし	外面底部回転余切り、無調整	内面、無調整 内面、横ヘラミガキ	土					
	4 b							高台あり	外面底～周辺部手持ちヘラケズリ		土					
	A II - 1 a ₁	10×4.5×2.5	酸化炎	やや硬～硬	ロクロ水引	し	内	高台あり	やや深い环部	内面、無調整 内面、無調整	+					
	1 a ₂							高台なし	＊ A II - 1 a と同じ技法の小型皿形環		○					
	1 a ₃							高台なし	外面底部回転余切り、無調整		+					
	2 a ₁							高台なし	＊ 外面底～周辺部手持ちヘラケズリ		士					
	2 a ₂							高台あり	＊		士					
	2 b							高台なし	＊ A II - 1 a と同じ技法の小型皿形環		?					
	3 a ₁							高台なし	＊ 外面底部回転ヘラ切り、無調整		士					
	3 a ₂							高台なし	＊ 外面底部回転余切り、無調整		+					
小形力メ	B I - 1 a ₁	15~18×?×?	酸化炎	軟～硬	ロクロ水引	な	内	＊	＊ 外面底部回転余切り、無調整ないしは胴体下部ヘラケズリ？	内面、無調整	士					
	1 a ₂							＊	＊ 1 a ₁ ～a ₂ と同様の技法。やや膨張り。		士					
	1 b							＊	＊ 外面、口辺部横ナデ、胴体部縫ヘラケズリ		○					
	B II - 1 a ₁	14~16×7~8×14~16						＊	＊ 1 a ₁ ～a ₂ と同様技法の極小變形土器		士					
	2 a							＊	＊ 外面底部回転余切り、無調整		○					
	B III - 1 a ₁	14~16×7~8×14~16						＊	＊ 内面、無調整		+					
	1 a ₂							＊	＊ 外面胴体部縫ヘラケズリ		+					
	1 a ₃							＊	＊ 外面胴体部縫ヘラケズリ		+					
	C I - 1 a	20~25×7~9×25~30						＊	＊ 外面胴体部縫ヘラケズリ	内面胴体部ナデツケ ＊ 縫ナデツケ	+					
	1 b							＊	＊		+					
	1 c							＊	＊ 外面胴体部縫縫毛目		+					
	1 d							＊	＊ 横刷毛目		+					
	1 e							＊	＊ 横ナデツケ		+					
	1 f							＊	＊ 横刷毛目		+					
	C II - 1 a							＊	＊ 横ヘラナデ、指ナデ		+					
盤	2 a ₁							＊	＊ 外面胴体中一下部平行タタキ目+縫ヘラケズリ	内面、無調整	士					
	2 a ₂							＊	＊ 縫ヘラケズリ		○					
	2 a ₃							＊	＊		+					
	2 b							＊	＊ くびれ弱い頸部		+					
鉢	D I - 1	31×10×?	軟	内	内	内	内	＊	＊ 横刷毛目	内面、無調整	+					
	2							＊	＊ 無調整ないしは		士					
	E I - 1 a							＊	＊ 外面底部周辺ヘラケズリ		士					
壺	E I - 1 b	25~28×8~9	酸化炎	軟	内	内	内	＊	＊ 内容気味に外傾する器壁、体下部ヘラケズリ	内面、無調整	士					
	F I - 1	30~35×?×?						＊	＊ 直線状に外傾する器壁、ケズリ不明		士					
	F II - 1	12×?×?						＊	＊ 外面、胴体中一下部、縫、斜めヘラケズリ		士					
	F III - 1 a	40~55×?×?						＊	＊ 外面胴体上部、横ヘラケズリ中下部タテヘラケズリ		士					
	1 b	＊						＊ 無文當て痕	+							
	2 a	30~35×?×?						＊	＊ 外面胴体に斜交する平行叩き目		+					
	2 b	×?						＊	＊ 菊花状當て痕		士					
	2 c	＊						＊ 外面胴体に平行叩き目とタテヘラケズリ	士							
	3 a	15×?×?						＊	＊ 胴体縫ヘラケズリ		士					
	G I - 1	6.5×5.5×28						＊	＊ 不明		士					
鍋	H I - 1	31×?×?	酸化炎	軟	内	内	内	＊	＊ 外面無調整	内面無調整、頸部接合痕あり	士					
盤	I I - 1	11×9×11						＊	＊ 外面口辺部横ナデ、胴体部横ヘラケズリ		士					
その他 の小型 器種	J I - 1	5~6×3~						＊	＊ 内面体部横ナデ		士					
	2	3.5×4~5						＊	＊ 外面胴体部縫ヘラケズリ		士					

硬きの基準
硬……爪ではじくと石質の音が出る。
やや硬……爪より少し硬い。
やや軟……爪と同じくらいの硬さ。
軟……爪より軟らかい。

出土数量
一士十〇
な極少多極
し少
し
少
多





第8図 鴻ノ巣館遺跡出土土器類分類別模式図(2)

括分類し得る。このグループは粘土紐の巻き上げないし輪積みにより成形され、口辺部内外両面には横方向のナデ痕が見られ、胴体部外面には横方向のヘラ削りがなされている。

I群

ロクロを利用しないで成形された平底球形の小型土師器である。図示したもの1点のみ出土しているが、一応I群I類として分類し得るものである。図でもわかる様にこの器種は、器壁が大きく内弯し、口辺部が内側にまくれ込んでおり、その底部には、木の葉の圧痕が残り、胎土中には砂が多く含まれている。器壁の外面は、体部全体にわたり横方向にヘラ削りされている。内部は横方向にナデられているらしいが磨滅が著しく不明である。

J群

A～Iの各分類に含まれるもの以外の弯小型容器類である。この中に含まれる器形は各種あると予想されるが、実際に確認できたのは次に示す2種のみであった。いずれも、平捏ねか、粘土紐の巻き上げなどによって成形されたもので、ロクロ調整の痕跡は見られない。いずれも焼成技法上従来土師器に含められている種のもので、J群I類としてまとめられる。

I-1類 小型カメをさらに小さくした様な器形で、胴部の内外がヘラ削りされている。

I-2類 平底丸形の器形で、胴体外面は横方向にヘラ削りされ、内面が横方向になでつけられている。

以上が今回の調査で得られた土器類についての分類基準である。この分類基準を設定するに当っては、出土した土器全般にできるだけ細かに観察を行ない、できる限り客觀性を持たせる様に考慮したが、その意図は充分に達成されたとは言い難く、いくつかの混乱と錯誤がある様に思われる。それと言うのも、得られた資料の大部分が破片資料であり、全形の同える資料が乏しかったためである。その上、個々の破片を修復し、他の遺構や遺跡の資料と比較検討するだけの時間的余裕が我々に無かったためでもある。しかし、その様な制約があるものの、この分類基準によって、採集された土器類の大半が網羅できるであろう。

いずれ、分類上の不備な点に関する検討は後日行なう事にして、今回の報告に当っては一応遺構の内外から出土した古代の焼物類については前記の分類記号で表示する事にしたい。なお、前記の分類基準によって分類した焼物類の分類別の点数は、本報告末尾の第27表の出土遺物一覧表に示した通りである。

[3] 遺構と遺物

(a) 竪穴住居跡

A F03住居跡 (第9～13図、第3・4表、写真2、11、19～22)

[位置] 調査区の北端部に位置し、その一部は東側の私有地内に入り込んでいる。

鴻ノ巣館遺跡

[規模、形状] 今回の調査で発見された住居跡のうちでは、最も規模の大きな隅丸方形の堅穴住居跡で、東西約6.5m、南北辺5.2m、検出面よりの深さ0.1~0.2mを測る。その南北辺は真北に対し約45°西に振れている。

(柱穴) 住居跡内には、第3表に示す様な合計13個のピットがあり、さらに住居跡西辺に外接してピット1個が検出されている。これらのピットのうち、支柱穴と思われるピットは8あり、P₁~P₄までのグループとP₅~P₈までの2グループに分類されるが、いずれも住居跡の対角線上に対をなして並んでいる。

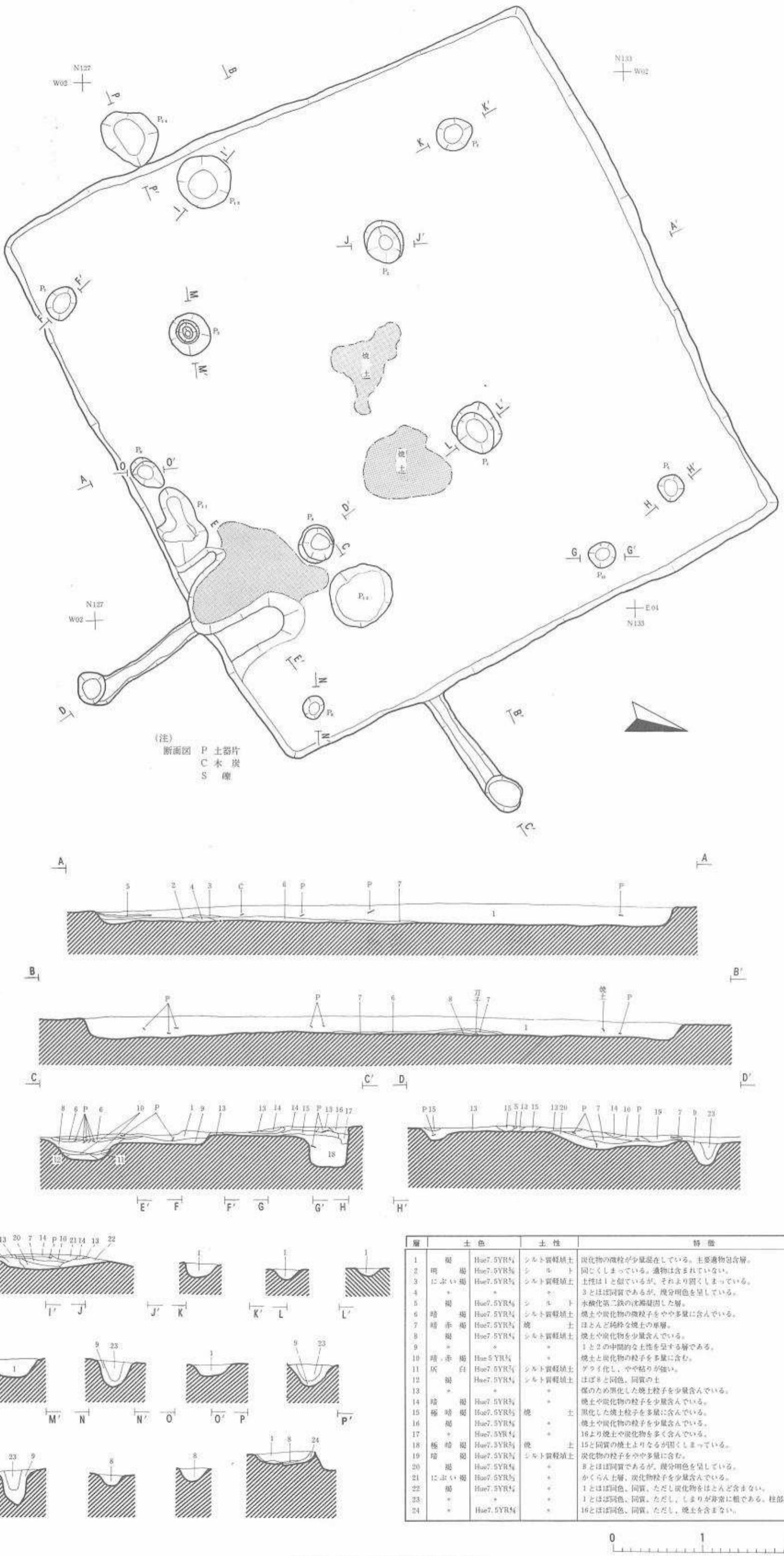
両グループのうち前者は、住居跡の中央部に位置し、心々間の距離が2.1~2.7mの間隔の長方形に配置されている。柱穴はほとんど円筒形を呈し、深さは後者より少し深めである。距離が長辺で5.3m、短辺で4.6mのややいびつな長方形に配置されている。

以上のピットは位置関係からみて、この住居跡の主柱穴ではないかと考えられる。ただし両グループが同時期に共存するものか、時期的に前後するものかは不明である。また、後述する様に、かまどが2基発見されているという事実とも合わせて、住居跡の重複の可能性も予想されたが、それを証明する事実は調査時には確認出来なかった。

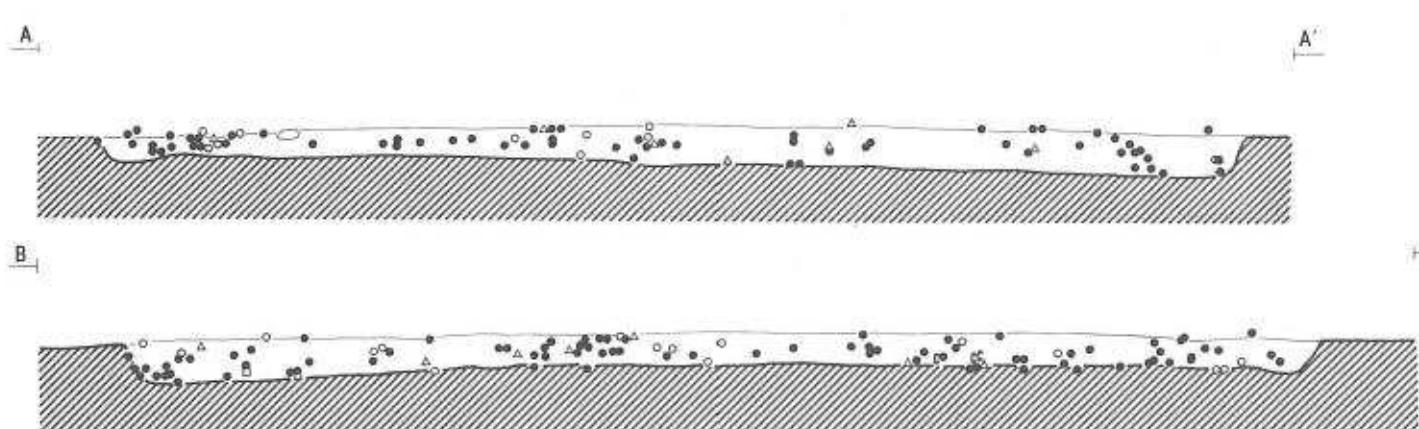
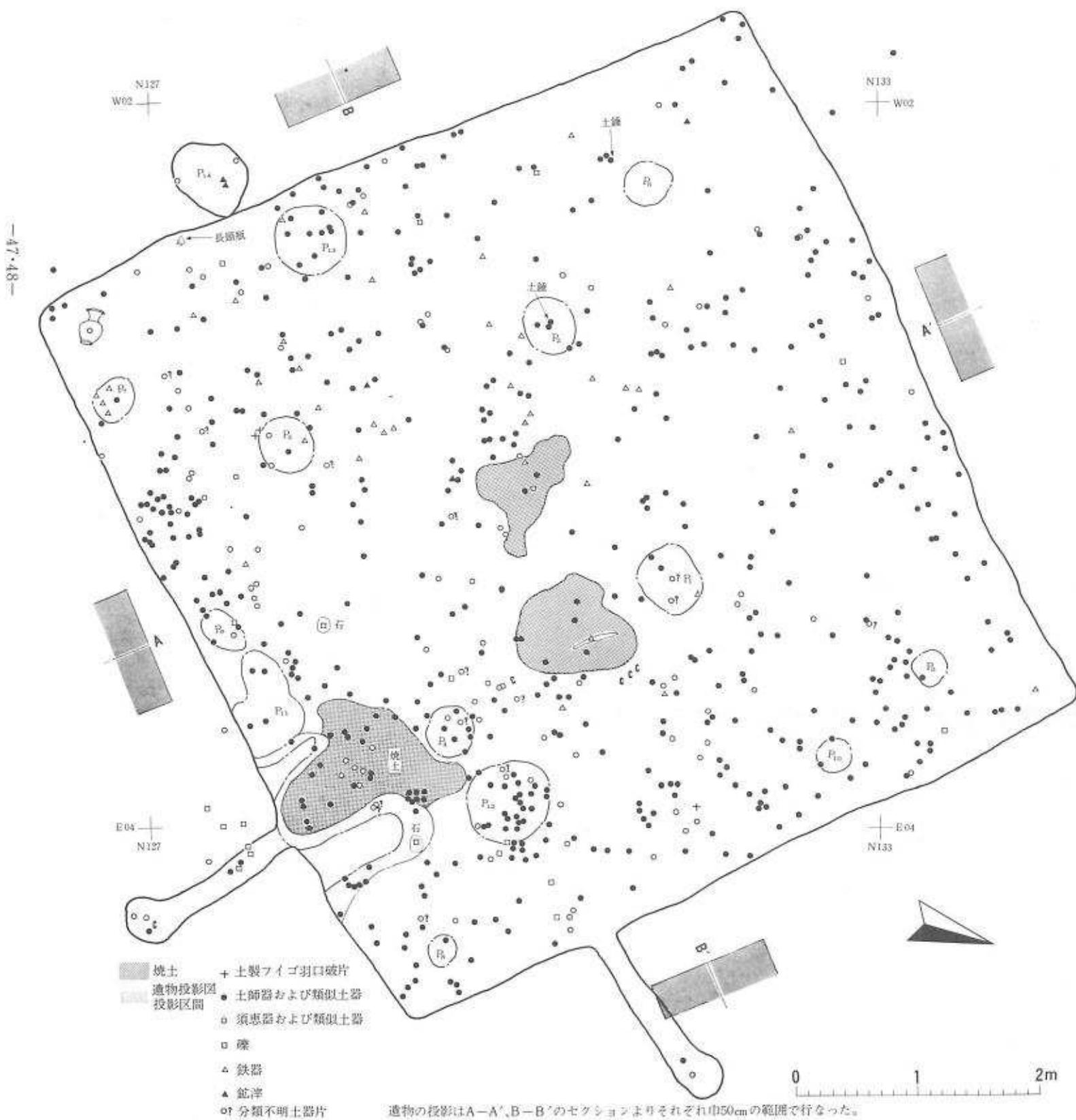
[付属遺構] 住居跡に付属する遺構としては、P₉~P₁₄のピットと2基のかまど及び中央部の焼土遺構がある。

第3表 AF03住居跡ピット一覧表

ピット名	平面形	断面形	平面規模(m)	深さ(m)	埋 土 状 況	出土遺物
P ₁	不整橢円形	掘 鉢 形	0.56×0.48	0.22	褐色シルト質軽埴土など	焼物類、鉄器
P ₂	*	*	0.5×0.42	0.26	*	焼物類、土鏡
P ₃	*	*	0.48×0.46	0.38	*	焼物類
P ₄	*	*	0.44×0.4	0.24	*	焼物類
P ₅	*	浅い掘鉢形	0.3×0.3	0.09	*	なし
P ₆	*	舟底形	0.42×0.38	0.14	*	*
P ₇	*	*	0.4×0.3	0.16	*	焼物類、銅津
P ₈	*	浅い掘鉢形	0.26×0.24	0.13	*	なし
P ₉	*	*	0.42×0.26	0.14	*	*
P ₁₀	*	*	0.3×0.28	0.1	*	*
P ₁₁	不整円形	不 明	0.84×0.34	0.15	不 明	*
P ₁₂	不整橢円形	掘 鉢 形	0.74×0.64	0.2	焼土や炭化物を含んだシルト質軽埴土。	焼物類
P ₁₃	*	*	0.62×0.58	0.2	褐色シルト質軽埴土	*
P ₁₄	*	浅 鉢 形	0.68×0.52	0.12	*	なし



第9図 AF-03住居跡平衡面実測図



第10図 AF03住居跡遺物出土状況平面図・投影図